
NARUTO ~ 飴色疾風伝 ~

茶摘み鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO ～飴色疾風伝～

【Nコード】

N7923M

【作者名】

茶摘み鶏

【あらすじ】

これは『もしも』とある原作キャラと同じ誕生日の主人公が、さらにとある人と同姓同名だったらという物語。

ナルト世界に、名前も出ない極貧一家の脇役として転生した主人公。主人公はちよつとずれた思考に加え、唯我独尊を地で行く不動の精神携持ち主。

あげく極度の方向音痴で、そのせいで原作に巻き込まれないようにしているつもりの主人公を【微妙】な具合で原作に絡めていく。

転生人生、方向音痴、貧乏の三つの脅威（主人公にとって）がそろ

い、原作をやがては破壊することになる！？……かも？

ただいま原作探しの旅に出ているので更新休止中です。マダラの口調が分からないので漫画読んできますorz

00 転生（前書き）

これはナルトの二次創作であり、作者の勝手な妄想による産物です。この作品は、だれかの一人称視点&口調風で進みます。

なお主人公は自ら脇役宣言をしているだけあり、ナルトと一緒に班になったり、表立って原作軸に関与することはありません。

オリキャラは必要最低限ですが、完全オリジナルシナリオではなく原作に沿って進みます。

一人称視点、二次創作、原作沿い、オリキャラ登場、ナルトとかかわりが薄い、原作崩壊　　そういったことが苦手な方は申し訳ありませんがユーザー願います。

昔も今も記憶力にだけは自信があったわたしは、一つだけどうしても思い出せないことがある。それを疑問に思う。

いつだ？

いつ、わたしは死んだのだろう…

はっきり言って、わたしはどこにでもいる女子大生だった。

一つ違うといえば、恋とか恋愛とか、ピンク色な世界が嫌い、むしろ拳を握り合う暑苦しいバトルの方が好きだったことぐらい。

だから服装とか、ベッタベッタな少女コミックや、エロ重視な小説とかまったく興味がなかった。

わたしの気を惹いたのは、一番は『ジャンプ』だ。

あの毎週出る雑誌ほど、ワクワクできるものはなかった。

…たしかに『ジャンプ』は好きだ。

でも。

だからといって、飴玉を一個放り投げて口でキャッチした瞬間、どつかの誰のか腹の中というのはおかしくないか？

しかもあの飴玉とて、市販のただの飴だ。

瞬きした瞬間には、生ぬるい世界の中で　壁の外の声だけは遠くに聞こえていた。

どうやらわたしはなにかの事情で転生したらしい。

しかたない。

きてしまったからにはどうすることもできはしまい。

そうして腹の中で話を伺っているとき、聞いた単語にやはりファンタジー世界だったかと飽きれた。

『火影様』 『四代目』 『忍』 『忍者』

さすがにここまで聞いて、母がいる場所がどこか理解してしまった。これもまたジャンプの作品でNARUTOという忍もののお話があった。

それに違いない。

今の話から考えるに、どうもわたしは原作軸にかなり関わる時間軸を生きることになりそうだ。

とりあえず。

わたしの生まれる家が、名家や旧家でないといい。ついでに誰かに成り代わるなどしていないといい。

わたしは普通の日本人女子だったのだ。

わたしはわたしらしく、無理せず平和に生きるだけだ。

それがわたしの二度目の名前。

さあ、二度目のわたしの人生の始まりだ。

吉とでるか。凶とでるか…たのしみだ。

01 ナミカゼ一家（前書き）

完全に一人称視点で、くだけた口調風です。

正しい文章の書き方や使い方でないことが多々あると思います。
軽い気分で読んでいただけるとありがたいです。

01 ナミカゼ一家

わたしが生まれたまさにその日。

その日に九尾が現れ里を襲い、四代目火影が死んだ。
そしてうずまきナルトが生まれた。

そんなんで月日はたち。

わたしはついに明日にアカデミーに入学する。

マンガの主人公であるナルトは、たぶん友達ができるようにという
火影の余計な配慮だろう。わたしより三年も早く入学していた。

この世界のアカデミーは、日本のような細かい年齢制限はなくお
ざっぱだ。

ゆえに、原作に関わりたくないのに、彼とは同級生となることが決
まった。

さあ、うずまきナルトの冒険が始まるぞ。

ただどわたしはできるだけ自分の身に降りかかる火の粉は払いのけ
たい。

つまりは原作には関わる気がないということだ。

この世界では未来に当たるナルト達のこれからのできごとである
マンガの内容。

大概、未来を知っていたら、裏表関係なく少なからず介入したくな
るものだろう。

何度も言うが わたしは関わるつもりは一切ない。

我が家の家訓は、預金万歳！！

目指せ、脱貧乏！！
普通モットー！平和最高。

こんな家で生まれたわたしには、主人公たちのような大きな力も
いい家柄もない。

一般人ではないわたしは、マンガどおりの大きな事件が起きても
どれも間違いなく生還できそうにない。

だから絶対に原作なんかに関わらないぞ！！

生まれたその日にわたしは決めたのだ。

「はあ〜い、これで準備は万端ね。ミナモちゃん、明日からは頑張
ってね。」

お母さん、明日はバイトの方に行かなきゃいけないけど、入学式にい
けないけど……。

た、たとえ…貧乏とのしられようとも…ぐす…負けないでいくの
よ……ぐすぐす…」

「問題ない母よ！立派な稼ぎ手になるべく、わたしは忍術を学んで
偉くなってくる！！笑われたらそいつを将来見返してやるぐらいに
はな」

「本当にごめんなさいね。せつかくの娘の晴れ舞台なのに、うちは
貧乏だから。」

でも一日でも休むと給料が減っちゃうし。ごめんねミナモちゃん、
明日を生きるための」

「何を言っている母。内職までやっているのだ。母に無理はさせら

れない。アカデミーの入学式。わたしなら大丈夫だ」

「ミナモちゃんのそういうかつこいいところ。お母さん大好きよ」

「わたしも、わたしの母がアナタであって嬉しい」

「まあ」

母と明日の入学式について話していると、突如ドタバタドタバタとあばら家に近い我が家を激しく揺らして父が、泣きながらかけつけてきた。

「ああ、やばい！やばいぞ母さん！！」

「どうしたの？」

父はわたしたちの目の前で急ブレーキをかけると、涙と鼻水で顔をぐしょぐしょにして土下座をしてきた。

「せつかくの入学式だというのにミナモの新しい服を買ってやれない！！！！

こないだの光熱費でうちにあつたへそくりは消えた！！」

「うーん。困ったわねえ。ちょうど髪を染める染料もなくなっちゃたのよ」

「なに！？それはまずい！！」

これではまた間違えられる！！いや、それ以前に俺たちのせいで…四代目火影様の威信に関わる！！」

「父、母。あれはどうだ？なんと聞いたか…そう変化の術とかは？」

「ああ、ミナモ。俺も母さんも無理だ！」

「「なんたって一般人だから！」」

「そんなところで意気投合するな！！！！」

「とりあえず一つはあるから、お父さんは髪を全部刈ること。ミナモは早く変化の術を覚えてくるように頑張ってね」

「ごめんよごめんよ！俺の稼ぎがほとんどなくて！！お金がないばかりにミナモに忍者になってもらおうなんて！

しかも俺が四代目と同じ苗字だったばかりに！？」

「あら、まあ」

「落ち着け父よ。こなた叔母より娘さんのお古をいただいた！明日はそれで行く！」

「うづうづ…。本当にいつもすまない！」

今の会話でわかるだろうが、わたしが生まれた家は、名家とはまったく真逆の立ち居地だ。

そう、ズバリ 貧乏なのだ。

しかも超の付く極貧。

さらに四代目と関係ないのに、いつも連結されてしまっ…

なみかぜミナモ。

十月十日生まれ。

髪の毛、おいしそうな蜂蜜を思わせる飴色、ふわふわくせつけ。

瞳、茶色。

今のプロフィールだけでも、違っるのは名前の微妙な差異。そして目の色ぐらいだろう。

これだけでなんとなく想像できるだろうが、我が家は『どっかの誰か』に物凄く似通った姓と容姿をもつ。

はじめにこれだけはいっておく。この世界の主人公たる金色の少年との血の繋がりは一切ない。

わたしたちは、ただ生まれた日が一緒だっただけで、偶然四代目と同じ読みをする苗字というだけの一般人だ。

『なみかぜ』という名は四代目と同じ読みだが、じつは漢字が違う。我らが姓は『並風』　大きすぎず小さすぎず、波風たてず常に中でいようという意味の　すばらしき普通人生をもとめる一家だ。

いくつかの似すぎた類似点。

そんなわけで、波風ミナトが四代目となったばかりに、この極貧一家は彼に恥をかかせないよういつも必死だ。

例えば、「なみかぜ」姓。

四代目火影を思わせる名前と、髪。

あまりに似ているので、その関係性を疑われるのを恐れた我々、父とわたしは蜂蜜色の髪をいつも黒く染めることにしていた。

運良く隣りの家が薬局だというのも良かったので、安く売ってもらっていた。

つが、しかし。

極貧のあまり、ついに髪染めさえ買えなくなった。

在庫はわずか。

わたしが、忍術を学ぶのも急がなければいけないだろう。

特に変化の術とか。

しばらく父は丸刈りでいることが決定した。

これもすべて、我らが極貧一家と四代目火影が関係ないことを示すためだ。

こらえよ父よ。

01 ナミカゼ一家（後書き）

主人公：並風ミナモ（ナミカゼミナモ）

02 友達（前書き）

注意

ちよつとだけ「ブリ・チ」ネタがでます。

02 友達

「まって、まったミナモちゃん！そっちじゃないよー！！！」

「ん？ではどこだ？」

「おまえら、こっちだ！！！」

「なるほど。アカデミーは向こうか」

「つてえ！そこの女！！そっちじゃねーつての！！！」

ズンズン森の方へと進もうとする黒髪の少女をみて、バタバタと二人の少年が駆け寄り慌てて引き止める。

「ほら！いそげ！！時間ナインだから！！！」

「ふむ。ここはどこだ？」

「だからアカデミーじゃねえから！！！」

わたしは生前から極度の方向音痴だった。

今、おかしな道へ足を踏み外そうとしたわたしをどん底から救い出してくれた（冗談でただの迷子だ）のは二人の少年。

気弱そうな線目の少年は、機知の友。

小さいながらも隣りの薬屋　その跡取り息子である少年は、わたしにとっては幼馴染みとも呼べる存在である。

彼には、わたしは小さい頃からいつも助けてもらっている。

実際のところ、彼がいないとわたしはどこかに辿りつける自信がない。

例え『木の葉』の里の中とて、市場にたどり着く前には迷うのだから…。

そんなわたしの救世主。線目で穏やかな雰囲気の子の名は【鈴木一太郎】という。

“一郎”なのか“太郎”なのかどちらかにしろといたい。なぜなら、まんま一太郎だと、前世の世界にあったパソコンのソフト『一太郎』を思い出す。

一郎ならば、前の世界で人気野球選手の『鈴木 郎』氏のことかどうかうしてもちらつく。

いかにも私的な事情だが、ややこしいことこのうえない。そこでわたしは彼に会った瞬間言ったのだ。

「この際、花太郎と名乗れ！」と。

なぜ『花太郎』かというところ、地球にいたころ週刊ジャンプで連載されていた BLEACH というマンガに出てくる“山田花太郎”に、【鈴木一太郎】は似ていたのだ。

名前も、そして性格も彼は“山田花太郎”を髣髴とさせた。

違うのは目が線であることぐらいだろうか。

そうして、それ以降わたしは【鈴木一太郎】を『花太郎』と呼んだ。しかもどうしたわけか。それが定着してしまい、今では彼の両親までも“花太郎”か“ハナ”と彼をあだ名で呼ぶようになった。

少しだけ彼には申し訳なく思えたが、それはそれである。

さて。二人目の少年は、まったく知らないやつとだけ言うておく。

幼馴染みと共に、わたしを迷子への道からひきとめた髪も服も目も茶色の猫目少年は、今朝であったばかりの同期の少年だ。

彼もまた新入生で、アカデミーに向かっているところだったらしい。

名前は……
なんだったかな？

茶色の印象が強すぎて少年の名前を忘れてしまったが、たしか地味なくせに山も何もかもどこかにぶっ飛びそうな名前だったはずだ。たしか……

サトウ：一郎だったか？いや、違うな。一郎はハナの方だ。もっとこつ服と同じく茶色っぽくて、『カ』がついたような……。カ……ってことは、『枯葉』だったか？

そうか！思い出したぞ。

『ぶっ飛びそう』というのは、“においたちそう”という意味でのぶつとぶに違いない。

枯葉で連結されるニオイ。あるじゃないか。

イチヨウだ。

イチヨウの葉が落ちるとき、銀南がにおうんだよな。

ん？だが、まてよ。そうすると頭文字に『カ』がつかない。では違う名だな。

……もっと変な名前だった気がしなくてもないな。そしてどこか飛んでいきそうな感じだったはず。

山もぶっ飛び　茶色、ねえ。

地球の日本での知識において、平凡な生では『鈴木』『サトウ』……ん？そうか苗字は確か『山田』だ。

平凡そうで“山も吹っ飛び”と思ったのだから、佐藤や鈴木姓に近い種類で山がつくのは『山田』しかない。

名前は……えーっと。か、か、か……軽い？

カルイ？カルタ？

っで、茶色くて…におう？

そうか！！カレーだ。

少年はきつと山田カレーというのだ。

いや、まてよ。たしか三文字だったから…カレーいや、カレイか。そくに違いない。

なんとも、まあ。地味というよりもおいしそうな名前だ。

この世界は子供に随分と面白い名前をつけるのが習慣らしいから、これもまた普通なのかもしれない。

「よろしく。少年改め、山田カレイ」

「って！てめー！！おれの名前は彼方だ！カ・ナ・タ！！だれがカレーだ！！」

「ん？それはすまん」

まあ、そんなわけで。迷子のわたしを救ってくれたのは、原作キヤラとはいっさい関係なく名前さえ出てこない脇役の脇役達だった。これでわたしの学生生活も穏やかにできそうではないか。

アカデミー入学初日。

友達ができた。

キャラクター設定（前書き）

オリジナルキャラクターのみ掲載。

3話まででは『上忍：黒筆アザナ』はでてきていません。
ネタバレ注意

キャラクター設定

ナミカゼ一家

並風 ミナモ (Minamo Namikaze)

・10月10日生まれ

・性別 女

・金に近い飴色の髪(黒く染めている)

・茶色の目

・一人称「わたし」

・貧乏一家の長女

・チャクラ量は一般人より少し上、アカデミーでは中

・家庭の事情で苗字を名乗ることを嫌う

・記憶力はいいが、人の顔と名前を覚えるのが物凄く苦手

・極度の方向音痴

・唯我独尊を地で行く

並風 マリモ (Marimo Namikaze)

・性別 女

・黒い髪、肩ぐらいまでの長さのストレートヘア

・青色の目

・一人称「私」

・ミナモの母親

・忍ではない一般人

・バイトをたくさん掛け持ちしている

・喜怒哀楽が激しいが、怒っているときも笑顔が絶えない

・天然ではなく腹黒い

・ものをズケズケ言う（つが、これもすべて笑顔で言う）

並風 ミゾベ (Mizobe Namikaze)

・性別 男

・金に近い飴色の髪、ただいま磨かれたように綺麗なつるつるっげ

・茶色の目

・一人称「俺」

・ミナモの父親

・忍びではない一般人

・家庭の事情で苗字を名乗ることを嫌う

・『うずまきクシナ』にいじめられていたというトラウマを持つ

・しがいない食堂の雇われコック（安月給）

・泣き上戸

友達関係

山田 カナタ (Kanata Yamada)

・性別 男

・こげ茶色の髪、ツンツン頭

・茶色の目

・一人称「おれさ」

・アカデミーに入ってからミナモの友達

・チャクラ量は中の上（攻撃に特化している）

・まっすぐな性格で、明るい

・いろいろと染まりやすい（ナルトの側にいると口癖がうつるほど）

- ・少しキバに似ているが物凄く常識人

鈴木 一太郎 (Ichitarou Suzuki)

- ・性別 男

- ・黒い髪

- ・黒い目だが、線目のためその事実を知る者は少ない

- ・一人称「ボク」

- ・通称「花太郎」か「ハナ」

- ・並風家のお隣の、小さな薬屋の息子

- ・ミナモの幼馴染み

- ・チャクラ量は中の下（ただしコントロールが異常に優れている）

- ・ミナモにわかりづらいつと「花太郎」と命名されて以降渾名として

定着。

両親にも「花太郎」とよばれている

- ・まんま【BLEACH】の【山田花太郎】そっくりな気弱そうな

雰囲気

その他

黒筆 アザナ (Azana Kurohude)

- ・性別 男

- ・灰色の髪

- ・黒色の目

- ・一人称「僕」

- ・ミナモ班の担当上忍

- ・ ちよつと大人しめな性格
- ・ ミナモに迫力負けしている
- ・ 影も薄く存在感も薄いのが悩み
- ・ ミナモに振り回されては、ハナやカナタに慰められている

キャラクター設定（後書き）

話が進むにつれ原作キャラの性格が、原作とは異なる場合があるかもしれません。

その場合は「ここはNARUTOをベースにした作者の妄想世界」ということを踏まえた上で、ながしていただけるとありがたいです。

作者はチキンですorz

04 金色と飴色

アカデミーでは運がいいことに、あのナルトとはクラスが別だった。

なのでわたしは静かに勉学に励むことができた。

忍術の教科書をもらつや否や、わたしはさっそく“変化の術”の勉強をネツチヨリした。

「お前なら絶対まじめに勉強するわけないと思ってた」と、わたしが必死に勉強していると友達になつたばかりの山田カナタに驚かれた。

どうもわたしという人間は他人から見ると、ふてぶてしく絶対予習や復讐をこなそうなタイプに見えるらしい。

先生がくるまでの間に必死に教科書を読んでいたら、さすがに入ってきた担任にまで目を丸くされた。

隣に座っていた花太郎が苦笑を浮かべながら、カナタには事情を説明してくれた。

「つが、さすがに何度も説明するのが面倒で先生は無視した。」

「つまとるところわたしは、先生の話など聞く耳も持たずのわがままぶーで、チャライ奴にみえると？」

はたまた金持ちのわがまま娘か、どこかの旧家のまじめな跡取りに見えるということか。

そつか・・・金持ちのお嬢様はみんなたかびしやで下々を見下すのが当然だからな。

わたしはそれほどいやな奴に見えるということか」

それはいつたいたいどのオバカな金持ち娘だ。

そんなのと比べないでほしいものだ。

ハッ！

そもそもそんな奴など、どれもこちらからお断りだ。

逆にわたしがそのオジヨウから金を奪ってやりたいくらいだ。

なにせこちとら髪の毛の染め粉さえ買えない貧乏人だ。

そのための予習だ。

脱貧乏のための忍術だろうが。

「なんだ？もしやわたしから金をたかる気だったのか？バカも休み休み言うんだな」

フンと鼻を鳴らして憤るわたしに、慌てたように花太郎が間にわって入った。

「それ、ちがうからミナモちゃん！」

「なら何が違うんだ？」

「お前の言葉遣いが偉そうなんだよ。それでみんなお前はどこの偉いとこの奴かと思ってるんだろ」

「だが残念だったな、あいにくとわたしが金持ちでない」

「あと・・・そうだな。お前は、なんとついうか…。なんにも興味を持ってなさそうにみえる。」

だから授業も先生の話とか聞きもせず遠くでも見てそんなイメージがあつたから、まじめに勉強してるところを見たらイメージ違いきつてびびったダケだったの」

「山田カナタ。今のは撤回しろ。わたしは授業を無視して異次元生物と交信しているような変人ではないぞ」

「…』とおくでも見てそうな』だけでUMAとの交信になるのかお

前は!？」

「カナタも落ち着いてよ!ほ、ほら…み、ミナモちゃんはあんまり表情が動かないから。じゃないかな」

「なるほど」

・・・と、いうイメージらしい。

言葉遣いはこれが素なのだからどうしようもない。

まあ、“ミナモという奴のイメージ像”に関しては、すべてを否定はできない。

なにせ、わたしとて、勉学にいそしむなど『らしくない』とは思っただ。

この変化の勉強さえ終えたら、適度にさぼって、適度に授業を受ける。

それも人の印象に残らないようにできるだけ地味に大人しく過ごすのだ。

それには我が親友達は、丁度良いほど地味な名前で助かる。

ノート?そんなもの買う金はない。

なので近所の方からいただいた新聞の広告の裏が白いものを頂戴し、それを同じサイズに切って紐でまとめてノートとして使っている。

貧乏とクラスの子供らがののしろうとも事実だ。それにケチをつけるつもりはない。

気にする時間もつたいなかった。

むしろわたしが貧乏だと知っているなら好都合だと、「裏の白いらない紙はくれ」と協力を頼んだら、教室の一角に『うらじろー(裏白い)』と書かれた空の段ボール箱が置かれた。

『うらじろー』BOXは、名のとおり裏が白い紙が入れられるようになり、自由に好きな人が使っていいことになった。

主に愛用しているのはわたしだったが。

そうしてわたしは、クラスの誰よりも先に“変化の術”を習得したのだった。

+++++

「…しまった」

髪の色だけを変えることに成功し、染め粉を必要としなくなってしばらくして。

チャクラが突然切れた。

運が良かったのは、今が放課後であり、わたしが道に迷ったあげく森の中にいたことだろう。

道に迷ったのは、わたしが1人だったからだ。

本当は救世主である山田カナタと花太郎と帰るはずだったのが、彼らは掃除当番だった。

クラスの連中は気弱な奴にいいように掃除当番を押し付けようとしていた。

そいつらとカナタ達もひとつとらえて、「掃除はしつかりやれ。やらなければ虫がわいて使えるものも使えなくなってしまうぞ」と、そう諭すと彼らは顔色を青くして真面目に掃除を始めた。

なんで顔を青くするんだ？

それより。いや、なにも“パシリにされかけ君”までやらなくても…。

まあ、掃除が好きならいいか。

わたしは掃除当番でないし、内職をしなければいけないと先に帰ることを告げると、慌てたカナタと花太郎に1人では絶対帰るなどダメだしをくらった。

アカデミーと家までの道は覚えた。大丈夫だと告げてもそこは頑固な二人が折れることはなく、結局アカデミーのグラウンド隅にあるブランコで待ち合わせとなった。

っが、問題はそこでおきた。

やはりというか、人の話は良く聞くべきだなと、わたしは数刻前の自分を呪った。

また迷ったのだ。

たぶんアカデミー横の森の中だとは思うが…どこだよこは。

しまいには一般人でしかないわたしの涙にも乏しいチャクラがきれて変化が解けてしまい、金にしか見えない飴色の髪がさらされている。

しかもあたりにある薬草を見つけ採取ながら歩いていたら、騒がしい何かにぶつかった。

それは子供だった。

3人の子供が、1人の金色の子供を囲んでいた。

そして わたしは因縁を付けられた。

「なんだよてめえ！」

「お前こそこんな場所で何をしている？わたしはブランコにいこうとして迷った拳句、薬草を見つけて採取していたら尻が偶然お前に当たっただけだ。でかい尻で悪かったな」
「なんだよこいつ」

事実を言っただけなのに。

わたしの尻が当たってしりもちをついていたリーダーらしきガキが食って掛かってきた。

「そんな嘘が通じるかよ！！どうせお前もこいつと同じ髪だからってかばいに来た口だろう！！」

「だれがそんな小ざかしい嘘をつく必要がある？戯言も程々にしたらどうだ？」

そもそもわたしはブランコを探していたと言ってるだろうが」

「お前こそいい加減にしろよ！ブランコなんてすぐそこじゃねーかよー！」

そう言ってピシッ！と指差す方向3メートルほど先には森が途切れ、ブランコとグラウンドが見える。

これは助かった。

そう思ってブランコへ向かおうと、つい金髪とガキ3人組の丁度真ん中をさえぎったところで、ちょうど三人組の背後に傷に効く薬草を見つけて足を止めた。

あれがあれば、薬代が浮くだろう。

ここはアカデミーの敷地内だが、家計の足しに引っこ抜いていってもいいだろうか？

いや、許可は取るまい。ひそかに抜いて持って帰ろう。

そう算段したところで

「お前、なんでかばうんだよ！」

タイミングはとことん悪かった。

薬草へと向けた視線ゆえに、体制が金色少年をかばうような状態になってしまったらしい。

さすがにどうしたものかと考えていると、背後でうずくまっていた金色こと　うずまきナルト　が、うめき声を上げながら立ち上がった。

よるめいたナルトをみたら傷だらけで、すでにこのガキらと一戦交えた後だったようだ。

一度バランスを崩れて倒れたのを見てしまえば、起きる手差し出ししてしまうのは“体が勝手に”という条件反射そのものである。

だから何かを言われる筋合いはないはずなのだ…。

「なにそいつと仲良くしてんだよ！」

「そいつなんか里にいちやいけないんだぜ！」

「そいつがなにかおまえしらないのか!? 母ちゃんが言ってた! そいつは狐だつて!!」

「キツネはいなくなれ!!」

触れていたからわかる。

ナルトが悔しそくに拳を握ったのを。

ギリリと歯をかみ締める音も聞こえた。

こんなに立派な感情があつて、それを限界まで抑えることを知っているこの太陽のような金色が、狐のはずなかるうに。

ただの獣は、笑ったり怒ったりの感情は抱かないものだ。

あるのは本能だけだろう。

「かあちゃんたちがそいつとは話しかけても傍にいてもだめだって」

「そいつは化け物だからなにしたらっていいんだよ!」
「化け物は死ねばいいんだ!」

その言葉に、ナルトが拳を握って駆け出そうとした。
残念ながらその前にわたしが切れていた。

「ハッ! ドカスどもが」

ああ、うるさいうるさい。

小鳥よりも騒がしいガキどもだ。

こいつらはあれか? 主の言うとおりにしか動けないカラクリ人形か
なにかか?

ああ、なんてガキだ。

くだらない。

相手に向けて放つ【死】という、その言葉の重さを知っているか?
いいや。あいつらはその重さを知らないから親に言うがままにそれ
が正しいと信じ込み、重さを知らないままに忍びになるうとしてい
る。しょせん甘ちゃんのカキだ。

そう。死はいつ起こるか分からない、この世で最も恐るべき現象だ。
それは二度と触れ合うことのできぬ永遠の別れ。

無邪気に戯言に捉えることのできないような言葉をさえする奴らに
あきれてしまう。

親はいつたいたいという教育をしているのだから。

現にわたしは飴玉一つでその死をすつとばして生まれ変わってし
まったというのに。

すつとばしてはしまったが、もう会えない寂しさは知っている。
前世の親しい者たちがあの後どうなったのか、わたしのことで悲し
んでないといいが……。
そう思わずにはいられないんだ。

だから、小鳥たちの口を封じよう。

「だまれよ。ピーチク騒ぐしか能のない小鳥風情が、人間様に向け
てわめくな」

「な、なんだと！！！」

本当に いやになるほどこの里はわかりやすい。

「物まねしかできない奴らをののしつてなにがわるい？

『かあちゃんが』……だと？ならば親の言うことならすべて従うのか？
親が自分の友達を殺せといたら殺すのか？

親が死ぬといえは死ぬのか？

なぜこいつが化け物と呼ばれるようになったか、その経緯を考える
こともせず、きめつけるしかできないガキふぜいが上から目線でも
のを語るな！！

弱いものいじめて喜んでるなんてたかがしれる」

こどもというのは親を見て育つものだ。

この里のこどもたち、目の前のこどもたちは、みな大人たちのまね
をしているから、「言葉」や「死」の重さをわかっていないだけ。
だからさっさとお前たちは認めろ。

自分自身で【知る】ことを学ぶべきだ。

「周りの言葉ではなくたまには自分の目で見るとわたしは言ってい
る」

「いみわかんねーよ」

「そもそもそいつが全部悪いんだろ！」

「さつきからごちゃごちゃとさあ」

「そ、そうだそうだ！なにわけわかんないこと言ってるんだよ！！」

「わけがわからないのはお前らの短絡的思考だ！」

子供は大人を見て育つというが、自律しなくてどうする。

だから子供という生き物は嫌いなんだ。

「チャクラ量や血筋や頭の良し悪しなんか関係ない。現に貧乏なわたしでさえアカデミーに入れたのだから！」

このわたしの例こそ、個人を認める上では、他人も地位も関係ないことの証明となるぞ。

わたしは金と、この目で見たものしか信じない。

その結果、この金色はお前らより人間らしいと見た。

おまえらよりもはるかに良識もあり、人を思える『普通の子供』だと判断した。

だから話しかける。だから仲良くしようかなと思う。そのどこがわるい」

正義とか悪とかどうでもいい。

そんなものには実は敷居がなくて、一人一人見方が違うから。

全員が悪だと評価しようとも、本人にとっては正義から来た行動だったりする。

それと同じことだ。

だから善悪なんてわたしにはどうでもいい。

しかし普通はそうは考えられないらしく、善悪の決め方は、多くの者が同意した意見へと流れるのだ。

たとえば

九尾の器〓九尾〓里をほろぼした〓悪〓憎い

このようなおかしい図式が出来上がる。

だが、生憎、わたしにはわたしの理論がある。

そんなわけで、親の言葉を信じていじめを行なうアホをなぎはらうてしまった。

だって腹が立つたし。

まだ何か馬鹿なことをその口から吐き出しそうだったので、つい…。

なので金色が殴り返そうとしたのをとめたわけじゃない。

例えば彼が殴り返せばより里人にひどい目に合わされるとわかっていても、今のはあくまでわたしの我慢の限界による大人の嗜好から来た行動であると告げておこう。

倒れた三人を見て「やっちまったぜい」と笑っておく。

でもすぐに三人は立ち上がったので、睨んでやったら、「おぼえてるー」とありきたりな代名詞を吐いて逃げていった。

逃げる相手をむやみに追わないのもなぎ払うのも馴れてきたので、逃げた奴等のことは放置した。

さすがは借金取りを相手にしてきただけはあるなわたし。

ふむ。と、一人で納得していたら、背後でゴソッと音がした。

「あ、ありがとう…だってばよ」

すっかり忘れていた。

声につられるように振り替えれば、そこにいたのは案の定金色の子供。

我らが一族と同じ響きの名を持つ四代目火影によって九尾の器にされた、彼の子供。

「疑問があるんだが聞いて良いか？」

「え？あ、うん、なんだってば？」

「なぜ、言い返えさない？」

「…じいちゃんが悲しむってば」

やりかえそうとはしていたが、彼は「おれは化け物じゃない!!」とは一度も口にしなかった。

それに疑問に思っただけ聞けば、金色の子供は悲しそうに顔をうつむけた。

これがあの原作で太陽のようだと思っただけの子供か…

実物を見れば、どこにでもいる子供だった。

ただ普通とは違うのは、彼が誰よりも他人を気遣うことのできる子供ということぐらいか。

考え事していると、ふいにガバ！と勢いよく金色は顔を上げた。

そのままニツシツシと嬉しそうに笑って

「オレってばうずまきナルト！よろしくだってばよ！」

改めて言われた瞬間、わたしの中の記憶が一気に駆け巡り、体中の血が一気にひいていくのがわかった。

知ってはいたが、こっちはつきり言われると　思い出すのは殺戮の赤色。

「うずまき？うずまきって…『赤い血潮のハバネロ』の？」

父が生まれたばかりのわたしに刷り込むように言い聞かせたあの恐怖の代名詞『赤い血潮のハバネロ』こと、うずまきクシナ。そうだった。

目の前の金色は、四代目だけではなく、“彼女”の子でもあったのだ。

しかしナルト自身はまだ知らないらしく、ハバネロという単語にキョトンと首をかしげた。

それにわたしは我に返り、父から引き継いだハバネロの呪縛（＝恐怖）を強引に破壊して平静を保つ。

「ハバネロ？つて、なんだってば？」

「あ、いや。なんでもない。

わたしは、なみ…じゃなくて。ミナモだ。

嫌いなものは極貧と、4という数字だ……ん？つて、おかしいな」

想い人と名前が似てるという理由だけで、うずまきクシナという赤毛の女性に追い掛け回されていたと、いう昔話を父から聞かされてわたしは育った。

そこで原作と現状をちよつと思いだし、うずまきナルトという子供をさらに思い出して、首を傾げた。

この里の多くは、ナルトを器＝九尾本人であると決め付けてるけど、うずまき姓を名乗っているのだから、あのクシナさんの息子だとなぜ気付かないのだろう。

ナルトの髪は九尾を封印したから狐色をしているのではなく、クシナさんの夫が金色の髪をしていたんだとなぜ思いつかないのだろう。まあ、憎しみが目を盲目にしているのはよくわかるけど。

それとも何かの幻術の影響なのか。

まあ、彼女のことを覚えていたのが我が家だけだとすれば、それはあれだ。

里中になんらのかの術がかけられていることは明白ということ。

たぶん我が家だけがしつかり、うずまきクシナのことを覚えているのは、ナルトを生む寸前まで母も同じ病院にいたことが原因だろう。あるいは父へ植えつけられた恐怖が、術を弾き飛ばすほど上回っていたとか…。

どちらにせよ。

わたしの家は、九尾にかまっている暇もなく貧乏生活で忙しいので、ナルトがなんだろうがかまわない。

ので、手をとって名乗りあった。

もちろん。わたしが姓を名乗るはずもない。

とりあえず。

原作主人公格のキャラとであった日。

04 金色と鉛色（後書き）

ついにナルト登場！

そんでもって【うらじろー（裏白い紙）】大好きです。
我が家でも愛用してたり・・・

05 金色との再会

あの森での邂逅以降、わたしはナルトにはほとんど会っていないにせわたしはバイトに日々追われていてそれどころではなかったのだ。

そんなとき、わたしはナルトと再会した。

「あ…ハバネロの…ナルトか」

ついクシナのだか名前を呼びそうになってとめる。

しばらくナルトは不思議そうにしていたが、やがて思い出したように大きな声で指まで指された。

「あー！お前つてばあのときのー！」

「お前じゃない。ミナモだ」

「えー！なんで黒いんだつてば！？一瞬わからなかったてばよ」

てばよ…。

クシナさんに似て、なんとかかわいい口癖か。

まあ、それはともかく。

さっきの『間』は、わたしが誰かわからなかったからだったのか。どうやら髪の色が違っていたから、印象が違って見えたようだ。納得。

「染めた」

正確には変化だけだ。

説明が面倒なのでよしとしよう。

「ええ！？もったいないってば。本当にキラキラしてキレイだったのに」

「わたしの家は特殊でな。染めないといけない事情があるんだ。それができないやつは父のようにボウズにさせられる」

「え…そうなんだってば？ハゲはさすがにいやかも。なんか大変そうだってばね」

「わたしは地味に生きればそれでいい」
「ふん」

相変わらずカツコイってばね。そう言ってニツシツシと笑われ、ついその金色の頭をなでた。

うん。顔以外はどこもクシナさんに似てない。

なんだかぽかぽか暖かい小動物を前にしているみたいで、ナルトっていいとか密かに思った。

もちろんそんなことでホダされて、原作にかかわるわたしじゃないが…。

「ところでさあ。なんでミナモってオレのこと呼ぶ前に必ずハバネ口っていうんだ？」

「我が家にとってはお前はハバネ口の種だ」

「…はばねろって種あるんだってば？」

「さあ？」

そんな会話をして

ついでにわたしはナルトの悪口を言おうとしている奴（大概主婦）を一通り殺気をこめてにらんでおいた。

あーあ。なんてうらやましい。

あの買い物籠に山のように入った食材が。

あのおばさんの買った肉なんか、うちでは死んでも食べられそうもないし……

って、つい。金持ちの主婦達が途中からうらやましくて妬みから殺気が出ていたなんて 言えない。

まあ、ナルトのように賞味期限切れの牛乳を飲む事はないが、うちは毎朝牧場の手伝いをしてバイトをしたあと、直に牛乳をもらえるしな。

牛乳だけなら新鮮なものがすぐ手に入る。

他は…まあ無理だな。

そんな日常的なこと

06 父とナルトとうずまきと…

飴色視点：飴色の子供はあきれはてる

金色と出会ってから、しばらくして「物凄く心配した」とわたしを探しまくってドロドロになっていた花太郎と山田カナタと合流し、無事に家に帰った。

家ではまるっぱげが眩しい父が、職場先の料理店のエプロンをきて台所で軽食を作っていた。

父は木の葉の里にあるしがない料理屋のコックだ。ちまみに忍びよりメチャクチャ給料が安い。

服装からして、どうやら仕事の合間に、家に帰ってきたようだ。すぐに職場に戻るのだろう。

とりあえず。うかれていた父に、今日は何があったのと聞かれたので正直に答えた。

「父よ。今日、うずまきナルトにあったぞ。赤くはなかった。むしろオレンジだった」

「う、うずまき…?」

「そうだ。みなが化け物だと呼ぶが、わたしにはただの子供にしかみえなかった」

「ぎゃあーーーーー!!!!!!いやだ!にげるんだ!ミナモ、マリモ!!!クシナが!『赤い血潮のハバネロ』がくる!!!」

つと、まあ、こうだ。

父がナルトを避けるのは、その『うずまき』という姓に恐怖を覚

かもがオレとは違うように見えた。

その子とあったのは、アカデミーの林の中。
目の前のブランコを探していた　　迷子だっという変な女の子だった。

オレが名乗っても、化け物だって攻めることはなかった

友達にも絶対に苗字を名乗りたがらなくて、オレのことを『化け物』とは違う目で見る不思議な子。
何度かそのお父さんらしきスキンヘッドにあったことがあるけど、あの人もやっぱしオレを『化け物』としてはみてはいなかった。それが嬉しかった。

「ん。おや。その子は？」

「父。友達だ」

「え、ミナモのお友達！？それはすごい。こんな口ベタのミナモには絶対ハナ君たち以外の友達はできないと思っていたよ！
いやあ、君、うちの娘がお世話になっているね！こんな子の友達になってくれて本当にありがとう！！」

そういつて涙を流しながら握手を求められたときは驚いた。
思わず

「お、オレ、化け物で……」

こんなこと初めてで、どうしたらいいのかわからなくて慌てて手を離そうとしてそう言ったら、おじさんはペチンとオレの頬を軽くたたいた。
痛みも何もないほどの優しさで。

そのあと視線をそらさないようしっかり両頬を押さえられて、まっすぐに視線を合わせてきた。

「なにいつてるんだい少年！化け物とは貯めたお金もすべて尽きたひもじい瞬間に訪れるあのむなしさのことだよ！君のどこが化け物なんだい！？君は君だよ！」

そう真剣な眼差しで言われた。

そこにはオレを化け物という目は一切なかった。

「周りがなんといおうと、君自身はどう思ってるんだい？」

「……っ！！オレは…オレは…：…なんかじゃ…：…ちがう！！！」

「なら自分から化け物なんて認めちゃダメだ。最後まであがかくちや」

じいちゃんにさえ言われたことのない言葉。

それをさらっと言ってしまっつて。

あっけないほど簡単にオレを認めてくれて

頭が一瞬真っ白になった。

「父はまだあがいてるかな」

「それはそれだよミナモ」

嬉しくて、お礼を言おうとして。

そこでもう一度勇気を振り絞って声をかけた。

「あの…」

「ああ！うっかりしていた。わたしはなみ…じゃなくて、ミゾベ。」

きみは？」

「そういえば父にはまだ紹介していなかったか」

「オレ？オレってばうずま…」

「ひい〜！……！！！！！！！！」

「「あ……」」

ミゾベさんはオレを認めてくれてるんだと思った。

だけど名前を言った瞬間おびえられて、またかと泣きそうになった。

でも…なんだろう？

いつもと違う感じの“拒絶”に違和感を覚える。

そもそも『化け物』という単語ではなく「ハバネロが〜！！」と叫んでるところからして、何かが違う。

泣きながら去っていくスキンヘッドが遠くでキラリと輝いた。

結局、ミゾベさんは最後までオレを化け物とは言わなかったし、そういう目はしなかつた。

だけど。やっぱりオレを拒絶されたのは痛くて。

名前を名乗ったから？

でも『うずまき』の途中段階で悲鳴を上げて逃げられたのはなぜ？

もう頭の輝きしか見えないほど遠くに行ってしまったミゾベさんを見て、やっぱり嫌われたのかとおもって泣きそうになったら、ポンと隣にいたミナモに肩をたたかかれた。

「すまんわたしの父が。あれは『うずまき』というものが怖いんだ」

オレじゃなくて『うずまき』が怖い？

どういうことだろう？

ミナモはオレの考えてることがわかるのか、いまだ聞こえてくるおじさんの悲鳴が遠ざかっていく方を呆れながら見つめつつ教えてくれた。

「たとえば水に渦を撒いているのを見ると震える。父の前で『うずまき模様』なんて単語を言えば絶叫を上げる。赤いトマトをみると「殺さないで！」と土下座する。ハバネロをみると気絶する」

「うづわあ…。それ、共通点どこだってば？」

本当に共通点は何処だ？

聞いててなぜか冷や汗が出てきた。

なんでこうも申し訳ない気分になるのかはわからない。

ミナモは肩をすくめて言った。

「父いわく、すべてが昔のいじめっこだった一人につながるらしい」

「へ、へえ…」（汗）

「とりあえず。父の前で苗字を名乗らなければ問題はない…と、思う。たぶん」

翌日、なんとなくいつもとは違う何かを訴えかけるような痛いほどの視線を感じてふりかえると、壁に隠れるようにミゾベさんがい

「うちのお父さんが申し訳ありませんでした！」

並風マリモは三代目火影の執務室で、ペコリと頭を下げた。

「そうか。おぬし達は“ナミカゼ”の…」

「はい。クシナちゃんとは出産前日まで一緒でしたし、私は彼女とは仲良しだったんですけどね」

「おぬしらは口が堅いから信頼が置けるとミナトも言っておったから彼女を任せられた」

「いえいえ。さすがに上層部にクシナちゃんのことばれるのはだめでしたからね当時は。」

それより、うちのお父さんが本当に申し訳ありません。

あのひと本当にクシナちゃんが苦手みたいで。

そのせいで火影様の可愛がっているお子さんを傷つけてしまったよ
うで」

「どうせミゾベのことだ。あやつの中の九尾の存在よりクシナにお
びえたのだろう？」

なら、ナルトにとっては救いじゃよ。

おぬしらはナルトをナルトとしてみてくれるのじゃから」

帰り際、彼女は爽やかな笑顔で語ったそうなの。

「10月10日がきたら…」

「マリモ？」

「ナルトちゃん攫いに行きますんで」

「は？」

「いやですわ火影様。うちの子も誕生日なんですよその日。

つでもって、クシナちゃんの子を傷つけるような火影様なんて嫌い

です。それではごきげんよう」

マリモはそれはそれは普段と変わらない笑顔でもって、里の長を切
って捨てたのだった。

06 父とナルトとじゅずまきと… (後書き)

マリモ母さん最強伝説。

クシナさんとマリモは10月9日までは結構側にいたという捏造。

07 十月十日

十月十日。

毎年恒例のこの日が、今年もついにきた。

「ミナモはいかないの？」

同じく一般家庭の家出身ということ、なんだかんだで仲良くなった春野サクラに、今日の慰霊祭に一緒にいかないかと声をかけられる。

しかし誰が自分の生まれた日に人様の死を悼まねばならんのだ。

そんな憂鬱なことできるかと、毎年この日は我が家は慰霊祭には参加しない。

火影様も理由をわかっているから無理強いはしないのはありがたい。

「わたしは用がある」

「そつかあ。じゃあ、また明日ね」

「すまないな」

「いいわよ別に」

十月十日は九尾の襲撃のあった日であり、マンガ『NARUTO』では主人公となる少年の誕生日でもある。その日に里人全員参加の慰霊祭があるが…

考えたことはなかっただろうか？

うずまきナルト以外にもまったく同じ年同じ日に、生まれた者がいると。

九尾だからナルトを除外するのは仮にわかるとしよう。

だとしてもそれ以外の今日生まれたものにとってみれば、里中は悲しみにあふれた日。自分の誕生日を祝ってもらえないことがどれだけさびしいだろうか。

きっと三代目も含め、誰も思いつきもしないだろう。

なにせこの里は、あの日以降10月10日に生まれた者はいない。正確には、いるにはいるのだが、彼らは生まれた日付を一日ずらされて申請される。

たとえば10月9日だったり10月11日だったりだ。

生まれた者はその事実を知らされず、生んだ親たちは10日という日を忘れて、申請した日を祝う。

だから里人は、10月10日に九尾に見せ付けるように、自分達の憎しみと悲しみを思い出すためだけに慰霊祭をその日に行うのだ。それも里人全員参加なんて非常識なものをかかげて。

その日はいつも里中が通夜のようになる。

彼らは自分達のことしか考えてないから、過去という名の死者ばかりを見て、生まれてきたものを祝福するのを忘れる。

死んだらそこで人生は終わる。

その先に死者たちに未来はなく、死者は決して彼らの未来を導くことはないというのに。

あまりに深すぎる悲しみは、未来へ歩めるはずの生者をみむきもない。

「生まれた日に里総出で鬱になったり殺気立たれたらたまったもんじゃない」

里が壊れた日。

たくさんの人が死んだ日。

あまりに死んだ物の数が多すぎて、生まれた物の数は忘れられた。

うずまきナルトが生まれた日。

わたしも生まれた日。

だからわたしは今日だけは大人しくしない。

いつもとは違って少し良い服を着て、誕生日を祝うんだ。

黒い服を気もせず里を闊歩するわたしを周囲は不謹慎だといわんばかりの目で見てくる。

不謹慎。無作法者？それがどうした。勝手に言ってる。

こちらら喪服もパーティにいくような服を買う金なんかないんだからな。

「なんなのあの」

「毎年のことよ」

「今日が何の日か知らないのか？」

「死者への冒瀆よ」

キレイごとだ。

死者は笑わない。怒らない。

だがわたしは生きている。

なにより今日はわたしの誕生日だ。

それをキレイな衣服を着て祝って何が悪い？

死者は彼らに記憶の中だけとはいえ笑顔を振りまいているだろうに
…。

死者であつた者も誕生日には他者を巻き込んで祝つたのではないか？

なのに　死者はよくて、わたしは笑うことも誕生日を祝うのもだ
めなのか？

だが今

「里の恥知らずよ」

ほざけ。

わたしのことを何も知らないからそんなことが言えるんだ。

恥知らずと私を下げずむのなら。ならば　と、問いたい。

誕生日のわたしに対して、喪服でもって嘆き悲しみ、殺気を向けて
くるのは失礼ではないのか？

それにナルトに対するお前らの態度がどれほど大人気なく、恥ずか
しいことかわからないのか？

自分達だけを正当化してナルトを見下す言葉と行動のどこが、里の
恥以外の何者だというのだろう。

なんで火影はこんなアホらの小言を封じないのだろう。

だからナルトが傷ついているというのに。
わたしだってたまに腹が立つし。

いつそのこと言ってやるうか。大声でさ。

今日はわたしの誕生日ですが、何か？と。

言ったらすつきりするんだらうな！

時間ももつたないからしないけど。

・・・お前らがわたしの誕生日が今日だと知っていたら、なんと
いうだろうか？

恥知らずとののしつてくれたその口で、どう弁解するんだらう。

さっきの言葉をすべて撤回するのか？

それはないだらう。

彼らにとってわたしは一人の小さな子供。

しかしそれに対して今日死んだのは数十という人員。

なかには親しいものもいただらうし、なにより里で最も慕われてい
たものも死んでいる。

彼らがわたしを祝うより、今日という日を恨まないはずがない。

わたしの価値など複数の死者の数を前にしてしまえばある分けない
のだ。

「三代目は里を甘やかしすぎだな」

今日のような殺気だった日にそんなことを誰かに聞かれていたら、
間違いなくわたしは彼らの不況を買って殺されていただらう。

それはつまり、だれもわたしの誕生を祝ってくれていないということに等しい。

日付が過ぎた後にプレゼントや言葉をもらっても価値はない。10月10日を否定するなら、その日に生まれた存在を否定するなら、それはわたしへの否定と同じ。

「さっさと用を済まして帰ろう」

いい加減周囲の視線が鬱陶しくなってきた。

今日は慰霊祭に参加しない両親は一日中家にいる。

これから三人で誕生パ・ティーをするのだ。

翌日には幼馴染みが祝ってくれるとはいえ、ずっと小さい頃は三人だった。

だけど最近はずう。

「あけるうずまきナルト！」

「…でたくないってば」

「でてこなければ扉を蹴破る」

「……」

双子じゃないのに、血も繋がっていないのに。

髪色もそっくりで誕生日も同じ存在。

父親同士は苗字が同じ。

いつもこの日はとじこもってばかりの彼を引きずり出して、丸一日わたしの家に監禁するのが最近の誕生日の祝い方だった。

はじめは『うずまき』の血を恐れていた父だったが、10月10日

にさびしげな表情をみせるナルトをみつけて連れ帰ってきた。

「おいでおいで」って、壁に体を隠して顔だけ見せてさ、おびえたように青い顔で手をこまねいている姿はさすがに怖かったってば」

父を知るナルトもさすがにブルブルと体を震わせていた。

想像するもたやすいが、そこまで『うずまきクシナ』を怖がる父の気持ちかわからない。

ナルトはクシナじゃないのに。

ナルトに拒否できるスキがないほど、幽鬼のような父は怖かったらしい。

そうしてナルトの誕生日が今日だとするや、「ミナモも誕生日なんだよ」と笑って告げ、戸惑うナルトの手を引いて連れ帰ってきた。

その際うちの父は、愉快にスキップまでしていたそうだ。

ナルトがびびっていた。

うちにあるのは小さなホットケーキ。

それが我が家が出る最高のケーキだ。

誕生日おめでととはかかれず、ローソクがささっただけのそれが机の上におかれている。

「一緒に祝おう」

そう言ってナルトに笑いかけた父。

子供が二人できたみたいねと嬉しそうに笑う母。

わたしはニヤリと笑うと、困惑しているナルトをわたしの横に座らせる。

やりかたをおしえて、二人でローソクを消した。

それから毎年必ずこの日は、二人分祝う。式典のときに外に出るのは面倒だと、誕生日の前日からナルトを拉致つてとめることもあった。

今年はそれをしなかったせい、すでに里人から何か言われたのか、ナルトは物凄く卑屈でうつ状態だった。

外に出ることにおびえているのを見て、ハアと深い溜息が出た。

「よし。ならば変化をしろ。嫌ならわたしがおまえを勝手に連れて行く」

ナルトなら変化ぐらいできるはずだった。

なにせおいろけの術をやるぐらいだから。

だけど今日のナルトは変化をしなかった。

しかもまた室内に引きこもろうとしたので、宣言どおり扉を蹴りあけさせてもらった。

そこで扉の側にいたナルトは、みごとに破壊された扉に当たって倒れていた。

「ふむ。これもまた手間が省けたな」

ナルトがたおれたのをみこして勝手に室内をあさってわたしは布団カバーをはがす。

それで目を回して床で伸びているナルトの頭から足の先までをすっぽりつつみ、ひもでしばってナルト巻きをひとつつくりあげる。

中で気絶から目覚めたナルトがモガモガとあばれたが殴って昏倒させ、どこが首かわからなかったから適当に殴っておいた、それを引きずってわたしは家に持ち帰った。

里の中を通る最中は、奇異なものを見る視線がたくさん向けられたが、殺意を向けられるよりは断然ましだ。

それにこれから待ち受けることを思えば、気分は自然と晴れ、重いナルト巻きもそれほど苦はならなかった。

誕生日、おめでとう。

07 十月十日（後書き）

“あの日”の同じ日に生まれた子って絶対いると思うんです。

そういう子ってどうしてるのかなと思って。

ちなみに本当に慰霊祭があるかはわからないけど、いろんな二次小説であったので「ある」ということで書いてみた。

誕生日を一日ずらすっていうのも、漫画で里の姿をみて作者が思った疑問から生まれた捏造です。

08 卒業試験

アカデミーに入って、嬉しいことにわたしは目立つ金色周辺と関わることはなかった。

原作キャラでわたしと会話するのは、春野サクラくらいのものでろっ。

彼女以外とは会う機会もなく、あまり口をきかずに終わった。

ナルトは原作通りに派手ないたずらをたくさんしていた。

一番凄かったのはやはり、火影様の顔に落書きをしたことだろう。わたしは思った。

四代目の顔岩にこそもっとやれ！と……。もちろん言いに行くことも、応援することもできずに気が付けばイルカ先生にロープでぐるぐる巻きにされてナルトはアカデミーに戻ってきていた。

わたしは最終クラスで、ナルトたちと同じクラスになった。

かのイルカ先生とも仲良くなった。

しかしわたしはナルトと違って旧家連中とはそれほど親しくはないので、互いに偶然出会うか用がないと会話もしない。

まあ、だからといって仲が悪いわけではない。

なんたってナルトとは、一緒に誕生日を毎年祝ってるほどだし。

ただ、はつきり言うと、わたしはバイトでほとんど時間がないので、友達が少ないだけだ。

それに原作にはかかわりたくないからな。

彼らとは、この距離感が丁度いい。

つで。現在、目の前には、イルカ先生とミズキ。ミズキに先生なんてつけるのは、まじめに先生をしている人々への侮辱なので呼ばない。

これでわかるだろうが、アカデミーに入ったのが数週間前のことのように思い出せるが、あときは迷いに迷ったものだ。実のところ、もう卒業試験である。

ミズキの第一印象？

嫌いだ。
以上。

やつがこのあとナルトに殴られるとわかっていても、この手でボコらないときがすまないような胡散臭さ丸出しの奴だった。自分の矜持がその存在を許せなかった。

というか、ただ単に、顔を見たら腹がたつたのだ。

いかにも胡散臭いその笑顔に…。

だから卒業試験のとき、分身するときわざとコントロールを間違えてみた。

その分チャクラは減り、二体しかできなかったが問題ないだろう。

「分身の術！」

現れたのは2体。

ひとりは今にも倒れそうで、ひとりはなんか姿形からしていびつだった。

なんか筋肉質真チヨなのに腕だけに倍の筋肉が付いていて、あまりのバランスの悪さにか、歪な方な分身も酔っ払いように千鳥足でよれよれしている。

試験管の先生二人から微妙な視線が向けられ、イルカ先生は哀れそ

うに「最低でも三人は…」と泣きそうな顔で告げてきたが無視だ。だってわざとだから。まあ、流石に、わたしもここまで変な奴等が二人も出るとは思わなかったけど…。

あの筋肉豪腕に殴られたらいちころだろうねと思う。

とりあえず。

じゃあ、打ち合わせどおりよろしく。

心の中でひっそりと分身にエールを送る。

さすがはわたしの分身。わかってるね。

ひ弱そうな分身の片割れは、フラフラとイルカ先生の方へ向かっていき、ぶつかって先生に支えられていた。

これでイルカ先生を足止めする事はできた。

さあ、残りはミズキだ。

殺ってしまえ。

もうひとりの分身がわたしの笑みとともに動き出す。

片方へ注ぐ分のチャクラを9割がたそいつに注いでやったのでうん、目に見えて暴走してる。

「「あ…」」

「「うわぁー！！な、なんでこっちにくるんですかぁ！」」

暴走した分身を見て、わたしとイルカ先生の声が見事にはもった。ミズキは慌てている。

実際は、わたしの驚いたような表情の方が演技だ。

ただどそいつの動きを見たわたしもあまりの予想外なことにさすがに驚いた。

チャクラ量ともに筋肉のつきも多いせいか、わたしよりもあの分身足が速いし、殺気だった雰囲気怖い。

なんか　でかい方の腕を振り回して、ミズキに迫っていた。

あからさまだけど、相手はバランスの悪い分身。

そのせいで自分の腕を支えようと動いた際に、あつちにふらりこつちにふらりと足はおぼつかず、結果腕を振り回す形となり、いかにも暴走していますといった状況だった。

ただ、その目だけがまっすぐミズキを捕らえていて、目の前にあるものを破壊しようとしているようにしか見えなかったから、分身君もかなりの演技上手だと思った。

そういえば分身つて所詮みせかけなんだよね？

この技は影分身みたいにちゃんとした肉体がない。

つて、ことはあれだけチャクラを練りこんだのに、ミズキを殴れない気がするなあ。

まあ、いいや。

だってミズキだし。

突然のことに焦ったような表情をみせたミズキだけど、分身とわかつても絶対によけはしないだろう。

なにせ『いい先生』を演じているような奴だ。

彼ならきつとやってくれる。『慌てたフリ』をしてよけないハズだ。

てなわけで、さあ、やれ。もっとやれ。

「ヒー！助けてくださいイルカせんせー！！」

「ミズキ先生！？つて、ミナモ！いい加減消せー！！」

「えーでも。なんか言うこと聞かない」

イルカ先生の側によると、へにょんへにょんの分身を消す。ついでにあんだけミズキの醜態を見たからもついいやと、もつ一つのまっちょな分身も消すことにする。だつて分身じゃあ、ミズキ殴れないもの。しかたないから、あとでナルトにポロ雑巾にされてこいと思って消した。

へロンへロンな分身がポフンと消えた。

だけどね。

消えたのは一つだけ。

・・・うん？

本当に片方の奴、消えないんだよ。

「先生え、分身って自分の意思で動くんですか？」

「「は？」」

先生二人の呆然とした声がして

バキッ！！

ゲフ！！

呆然としていた隙を突いて、わたしの分身がミズキを懇親の力で殴っていた。

ミズキはつぶれた蛙のような声をあげて、吹っ飛んでいった。

わたしの分身は満足そうに勝利のポーズをとっていた。

ああ！あのポーズは、前世のわたしが一度はやってみたいと思った
『あたのジヨー』の勝者が片腕を天に向けて上げるやつではない
か！？
やるな。

さすがはわたしの分身だ。

それよりも…

さっきバキっていったよな？

「あれ？実体がある？」

「ま、まさか“影分身”か！？」

「いやいや先生よ。わたしはそのなんとかって術も術式もしらない
んだから違うだろ？」

分身といえば“分身”の術しか知らんし、印も間違わずに“分身”
のはずだ」

「あ…いや。たしかにそうなんだが…」

試験管としてみていたはずのイルカ先生なら知っているだろう？
それにあれはたしかチャクラの消費が激しすぎて禁術に指定されて
いたはず　　と、原作ではあったが。
なぜわたしが使えたのかは謎だ。

「先生。あれはなんだったんだ？」

「“影分身”か。…まあ、簡単に言うなら実体のある高度な分身だ
よ」

「なら、なぜわたしができた？しかも違う術式で」

そう尋ねればそういえばと答えが帰ってき、結局二人で首を傾げて
しまった。

分身にやられて目を回したミズキをよそに、わたしの分身は満足そうに親指を立てて「グツジョブ！」とわたしに笑顔をむけるとドロンと消えた。

彼女が消えたことで、わたしの中に彼女の感情が融合する。

「…なんかあのヘラヘラ顔が気に入らなかつたらしい」

「……試験…どうするか？」

「ミズキ先生はどうするんだ？」

まさか影分身だとはわたしも思わなかつたけど。

ミズキが本当に意識がないのは、感覚でわかる。

生徒の一撃でノックダウンで…。

お前、ちよつと油断しすぎだ。

そう思つてミズキをあきれた視線で見つめていたら、背後にいたイルカが卓上にあつた額宛をくれた。

「ミズキ先生の事は俺がやつとくからいいよ。お前は“影分身”をやつたんだ。十分合格だよ」

「…あまつ！？」

「！？せつかく合格にしてやつたのになんだその態度はー！！！！」

結局、イルカ先生に怒られた。

そのあと、ミズキは頬をはらして試験を遣り通したという。

ハッ。ざまあー。

ついでにゆるいイルカ先生に、額宛のお礼と称して、背中に鉄板をいれるよう助言しておいた。

西の森には入り口付近に傷薬になる薬草が群生していたような・・・

まあ、その辺はいいか。

どうせ傷の手当もせずそのままラーメン屋にいけるだけの体力があるのだから。

その日の夜。

ついに原作軸が始まった音がした。

「うるさい！！ひとのうちの屋根を大人数で通るじゃない！！」

屋根に穴が開かなくてすんでよかった。

大人数が屋根の上を走る　そんな惨事があつたあとの翌日、父は、家の補強をしようと言い出した。

しかしそれに必要な大体の額を計算して顔を青くして倒れていた。

母は、大量についた足跡を見て、この程度ならお金はかからないわねと、腕をめくって雑巾で拭き始めた。

わたしは火影様に文句を言いに行く途中で、ナルトをみつけておめでとくと告げた。

ナルトは額宛を大事にしまっているらしくいつも同じようにゴーグルをしていたが、「どうして知ってるんだってば？」と首をかしげた後、それでも嬉しそうにニッシッシと笑って　「ありがとう

．．．だってばよ」と言っていた。

少しは疑問に思えよと思ったけど、これがナルトだ。純粹で眩しい笑顔が、始まりのときを告げた。

太陽のような金色の時間のはじまりだ。

ついでに三代目火影へ、「スケベ」とだけ書いた無名の手紙を送りつけて、ピンポンダッシュのごとく逃亡してやった。

帰る途中で、またもや迷って、なぜか木ノ葉暗部の拷問・尋問部隊長 森乃イビキとであった。

どうやら暗部の管轄地域にまで迷い込んでいたらしい。どんだけ凄いだわたしとか思った。

そこでミズキをみたが、すぐに悲鳴だけ残してどこかへ連れて行かれた。

…みなかったことにしよう。

拷問・尋問部隊の一員だと思われる見知らぬ暗部の人に、家の近くまで送ってもらえた。

市場とか目立つ場所でもいいと言ったのだが、何度も本当に帰れるの？と尋ねられ、そのたびに逆方向に行こうとしたので結局家が目の前に見えるまで送ってもらっ羽目になった。

無事に家に着いた。

忍ってすげえ。

08 卒業試験（後書き）

ここで暴露。

実はミナモ本人は気付いてないだけで、かなりのチャクラ量を持っています。

なにせ日々“変化の術”を使っていれば、いやでもチャクラは増えます。

ミナモが気付いてないだけで、始めから量も多かったですよ。

だから気付けば、もっと忍術を使えるようになるはず。

ただしナルトほどチャクラはないので、影分身も一体が限界かと・

まだまだ続くミナモクオリティー

09 飴色の下忍班

わたしも花太郎もカナタも無事にアカデミー卒業試験をクリアした。

ナルトやサクラたちは、案の定そろって七班となっていた。

昼飯後に教室に集合しわたしの班員が呼ばれ、自己紹介は別の場所でしょうと上忍の招待でアカデミーを去るとき、なにげなく覗いた教室の中でポーションと残っている三人組を目撃したので、きつと力カシ先生に待たされているのだろう。

本当にご愁傷様である。

原作を読んでいるから知っているが、はたけ力カシはいつも慰霊碑のところで過去を振り返っているので遅刻している。

わたしは思う。

遅刻するのはかまわないが、できることならそんな回想など、任務の前ではなく帰りにやれよと言ってやりたい。

そうすれば何時間でも時間を気にせず親友さんといられるだろうに……。

なにより七班の子供たちがかわいそうじゃないか。

はっ!?

もしかして擦れ違いが激しくて、協調性のまったくない彼らの仲を自分が悪者になることでくっつけようと　　そういう魂胆だったのか!?

ならば何も言うもまい。

例え、その遅刻癖のせいで、依頼主まで待たせた拳句、里の信頼をなくしているとしても!

そんなわけで、下忍第七班の話はひとまずおいておこう。

わたしの班は漫画には一コマも出なかった【第四班】となった。ちなみにその数字を聞いたわたしの突っ込みは「死亡確定の班だな」というもので、それを聞いた隣人達の顔が引きつったのは疑問だった。だって事実じゃないか。

四〃死

なにより原作において、1コマもでない徹底のしよう。脇キャラもいいところだ。

本当は四という数字は、我が家には大きく関係のある『四代目火影・波風ミナト』を髣髴とさせるので、そのたびに頭が痛くなる。ここはしかたないのでわたしが妥協する。つが、しかし、ここで脇キャラとして下忍にさえなれないことだけは断固阻止させてもらう。わたしはどうしても忍にならなければいけないのだ。稼がなければ、生きていけないのだから!!

成績で組まされてしまっただけの集まりにすぎない第四班。

それでも使わない手はない。偶然わたしと組むことになってしまった班員には悪いが、なにがなんでもわたしが中忍試験に参加できるまでは……ふふ。

この班員、誰も逃がしはしない。

そう。すべては昇格して金をより多く稼ぐためだ。

原作？そんなの知ったこっちゃない。

+++++

スリーマンセルの班決めは、とことん平等だった。

わたしは一般人出身だし、チャクラ量が一般人レベルしかない。ゆえに成績はいつも中の中。

それに対するわたしの班員は、みな成績が中の連中ばかり。

「れ、連中って…そ、それはひどいよミナモちゃん」

「だー！なんでまたお前と組まなきゃいけないんだ！！アカデミー卒業してまでお前の面倒なんかみてられるか！！」

「何を照れているんだ？せつかく同じ班になったのだから、もっとかまってくれ。」

そしてわたしの素晴らしさにときめき、ひれ伏すがいい」

「お前をみてトキメクはずないだろう！！ってか最後のはなんだよ！？」

つと、このやり取りからわかるように、わたしの班員は、常に成績が並の上と並の下をいく二人。

“花太郎”こと鈴木一太郎と、山田カナタの二人の友人達だ。

花太郎は中の下。
カナタは中の上。
そしてわたしが中の中。

これで班として組まれない方がおかしい。

わたしとしては、幼馴染みとアカデミーで一番の友人の二人と組めたのは運がいい。

何らかの二次創作小説とは違って、イレギュラーなわたしという存在がナルトの班や原作の下忍班に組み込まれることはなかった。万々歳だ。

そんなこんなで、ただいまナルト達7班を残してわたし達は、全員そろって並レベルの集合体 第4班として、団子屋に招待されている。

我等の担当上忍が、自己紹介だけだから仲を深めようと考えたらしい。

もっばら彼の趣味と言つのもあるようだが…。

「はじめまして。え〜っと、僕が君達第四班の担当上忍になったわけだけど、これから仲良くやっていこう」

なにやら上忍が話しかけてきた。

しかし上忍のおごりらしい笹団子と緑茶が来たところで、ガツガツとくらくらくカナタ。

遠慮気味に苦笑した後、丁寧に手を合わせていただきますと線目をへニヨンとたらず花太郎。

わたしは笹をとりながら、笹でくるむという意味で同じなのだからもっと『ミ』になるチマキとかの方がよかったと…ついため息がで

た。

それぞれが違う反応を見せることに、上忍は花太郎に近い苦笑を浮かべた。

「それじゃあ自己紹介でも……」わたし達についての書類は貰って
るはずだ」…じ、自己紹介必要なさそうだね。アハハ。」

キツパリ、ハツキツリ言った。

すると言葉をさえぎる形になってしまったが、まあ、そこは諦めて
もらうしかない。

それにしても、事実を言っただけなのだが、なぜ泣く？

書類は持っているだろうに何で自己紹介を求めるのだろうかと首を
傾げていたら、本当に泣きそうな顔で上忍は乾いた笑いを浮かべた。
それに花太郎がやたら同情的だ。

どうもこの上忍、全体的に情けない。

ひよろりとした上に、ガキに慰められている様は信用できない。

このままではわたし達は中忍試験さえ受けられないのではないだろ
うか？

とにもかくにもその上忍は、マンガでは見たことない奴だった。

この気弱っぷりからもわかるとおり、よほど影が薄く、作者様の脳
内にもいないような脇役なのだろう。

「えー。えーっと…そんなわけで、君達は互いのことを知ってるか
もしれないけど、僕は君たちの事は書類でしかないわけ。
ほ、ほら！交流を深めるために…ね？」

冷や汗を流しながら、バタバタと手を振って慌てたように言い募

る上忍。

しかもこれまた原作の力カシ先生同様に、自己紹介を求めてきた。演習は明日からで今日は顔合わせということらしい。

先生はなんか必死にいつのつっているけど総無視。

チラリと時計を見る。

時間があまりない。

今日は七班以外は早く終わると踏んでいたので、3時から八百屋でバイトを入れていた。

しかし我が担当上忍は、どうも拳動が怪しい。

花太郎よりもビクビクしていて。

みてるこっちがイライラするような奴だった。

「自己紹介か……。だが、名を名乗るなら自分からするのが礼儀だろ？」

「あ、そ、そうだよな。ぼ、僕は黒筆アザナ。

えーっと見てわかる通りとりあえず上忍です。

そう、ですねえ。好きな物は笹団子と緑茶。桜の花とか紅葉が好きです」

桜に紅葉か。先生はどうやら“散る”ものが好きらしいな。

ここは空気を読み、さすがのわたしもツッコミはいれないでおいた。

「嫌いなものは……えーっと黙秘で。ほら忍はあんまり素性ばらすのはよくないですしね」

言いつつも、伺うようにチラッと一度だけ上忍の視線がこちらを向いた。

わたしの同意でもまってるのか？

だが、たしかに。それは最もだ。
素性をばらすのは忍としては得策ではない。
まあ、カカシとは違って、好きなものを言っただけましか。

そのときわたしは気付かなかった。

上忍やわたしの視界から離れた場所で、班員の男子が二人、こそこそと話をしていたのに。

どうせ気にするほどでもないだろうけど

「（ねえ、カナタ。先生頑張ってるね）」

「（だな。言わないのは正しい判断だよな。じゃないとミナモに脅されるネタになる）」

「（やつぱ上忍なんだね）」

「（…お前、今なにで判断した?）」

「（え。そりゃあ、ミナモちゃんのグサグサくる会話をかわせるかわせないかだけ?）」

「（ハナ…それ何かが間違ってるから）」

「えーっと…あの、三人とも?」

「なんだ?アザナ先生」

「え。先生?つて、やつと認めてくれたんですね!

「じゃあ、じゃあ、僕の話、ちゃんと聞いてくれてたんですよ!?!」
「聞くも何も自己紹介なら。紹介された話を聞かずしてどうする?」

好き嫌いを聞けば十分。

初対面での自己紹介なんてこんなもんだろう。

なら、手っ取り早くわたし達もすましてしまおう。

「自己紹介だったな。わたしはミナモという。嫌いな物は自分の苗字。と、数字の4。」

ああ、そうだ。先生もわたしのことは名前の方で呼んでほしい」

横で納得したようにウンウンと頷くのは、わが幼馴染みの花太郎。さすがはわかっているな。

そうさ。わたしは苗字と『四』という数字が嫌いなんだ。

「ほんと、ミナモちゃん。その二つは相変わらず嫌いなんだね」
「っでだ」

「なっ!?!ミナモ、お前人の話無視すんなよ!!ハナがかわいそうじゃねーかよ!」

「時間がないんだ!!」

「「「はあ???」「」」

「…というわけで、あっちは花太郎。あれはカナタ。

演習は明日からだな?ならもう帰ってもいいか?いや、わたしは帰らせてもらっつ」

「え!?!そ、そんなちょっともう少し話をナミ…じゃなくてミナモさん!?!」

「バイトだ!!」

苗字を呼ばれそうになってとっさに睨みつけたら、一瞬アザナ上忍の動きが止まる。

苗字……もう先生なんて呼んでやらん。

時計を見るとさつきよりも進んでいる。

本当に時間がない。

バイトがあるんだと要件だけ告げると、わたしは四班の仲間を無視してバイト先に向かった。

+++++

結果からいうと。

市場には たどり着けなかった。

時計を見て、独学で覚えた というより、教師やいろんな上忍によつて覚えさせられた 口寄せの術で、忍鳥をよびだし、八百屋のおやっさんに「たどり着けそうにない」という謝罪の文を書いて届けてもらった。

現在。なんか暗くてジメジメした広い場所にいる。

どこだろうかここは？

そつえばさつき小石に躓いたら、突然目の前に穴が開いてわたしはそのまま落っこちた。

どうやら地面が陥没したらしい。

縦穴はしばらく続き、やがてどこかのパイプに合流していた。

勢いのままわたしは落っこち続け、少しの土と一緒にパイプからなにかの建物の中に吐き出された。

「ぬわっ!?!」

ごろんごろんとパイプの中を転がりながら、慌ててクナイをふるって速度を落とすが、結局は落ちたのには変わらなかった。

こういう時は、体を鍛えて忍術を学んでおいてよかったと思う。だけど体があちこちイタイ。

こんなこともあるのかと常備していた打ち身薬（手製）を取り出し、塗っている

「だれだ？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

10 迷子と暗闇の秘密

「お前は……」

だれだと聞かれたので、振り返るとそこには仮面の男がいた。あー。誰だったか？

でもこの声は聞き覚えがある。

「落ちたのか……。どこをどうやったらあんなところから？」

土がこぼれてくるパイプ。

天井のそれと、その真下にいるわたしを交互に見比べて、男は納得したように額に手を当てていた。

たぶん仮面がなければ、彼は眉間の皺でも揉み解していたに違いない。

「里へ戻れ、並風ミナモ」

「いや帰りたいのは山々だが、地盤沈下に巻き込まれて気が付いたらここにいて……ってか誰だ？」

「お前なあ……」

声は聞いたことがある。

だが仮面をしていちゃわかるものもわからない。

それにわたしが人の顔と名前を覚えられるのは、原作キャラか、わたしと何度も顔を合わせている人間くらいだ。

相手は私を知っている風だったから、わたしと目の前の男は何度も会っているということ。それはつまり、わたしもきつと覚えている

……ハズ。
ただ声だけじゃ思い出せないのがわたしの脳みそだ　　本当に誰だ？

わたしが逆に聞き返すと、しわがれ声の仮面は物凄く疲れたようにため息をついた。

男はこつちまで歩み寄ると、地べたに平然と座っているわたしと視線を合わせるようにしゃがみこんで、仮面をとった。

「わしじゃ」

「あー、保育士の爺さんか」

「なっ!?!?なんでそうなる!?!?」

仮面の下から現れたのは、某暗殺者養成所の長たるダンゾウでした。

たしかに何度か会ったことのある顔だ。それに原作でもでてきたことがあるので、顔を見れば名前がちゃんと出る。

このひとに会うのはこれで何度目だったか？覚えてない。

なぜか迷子になった先や森の中で、やたらと彼らと会ったのだ。そのたびに里まで送ってもらっている。

今日はどうやら彼らの総本山にでも迷い込んでしまったようだ。

うん。漫画だかアニメでこの場所みたことあるよ。

それにしてもこの爺様や『根』の子つてけっこういい奴等ばかりだとわたしは思う。

だってダンゾウはたくさんの子供たちとなにやら血まみれ事件を起こしていたり、チャクラ刀を振り回させたり色々しても、わたしを必ず里まで送ってくれるのだ。

迷子を助けてくれる奴に、悪い奴はいない　　っと、これはわたしの価値観である。

それにこの人、本当に里が好きらしいよ。

原作でもみたけど、里が好きで大事すぎてちょっとやり方を間違っ
てしまったけど、本当に里を思っていたのはわかる。

現に、いまだって殺す機会がいくらでもあるわたしを殺さないのは、
里の人間だから……ということにしておこう。
なぜかはしらん。

「わしらがなにをしているのか知っていてなんで保育士になる？」
「いや。だってダンゾー、この前もその前もいっぱい子供つれて森
でピクニックしてたし」

「どこをどうみたらあれがピクニックになる!？」

「じゃあ、血まみれピクニックということ。それより……」

血が付いただけで何も変わってない。と、つつこまれたが、そこは
スルーしたら、爺様にメガトン級のため息をつかれた。

「おいダンゾー？」

「なんだ？」

チラリとこちらをみたダンゾウは嫌そうな顔をして、これからわた
しが何を言うのかわかっているようで顔を歪めていた。

だがこちらとこれを言わなければ、この先も生き残れないのだ。
ので 言うてやった。

「また、助けてくれ」

瞬間、またため息をつかれた。

おいおい。老い先短いんだ。あまりため息ばかりついていたら、幸
せが逃げるぞ。

それ以上幸が薄くなったらどうする？

髪の毛は…心配はなさそうだな。

だけど、それ以外の幸が減っているのは間違いないだろう。なんだか疲れているようにも見えるし。

あまりにため息ばかりつくので、こいつの幸せはもう残っていないのではないかと首を傾げていたら、そのしわくちやの手で頭をワシワシとなでられた。

顔は呆れの表情。

「……サイ」

彼が小さく誰かの名を呟いた瞬間、わたしとダンゾウのすぐ側に真っ黒な影が振ってきた。

原作よりも若いサイだ。

「……」

「送ってやれ」

無言のままのサイに、わたしは毎度すまないなと頭を下げる。

ダンゾウには「二度と我々には関わるな」と釘をさされた。

いや。むしろ関わりうとした覚えなど一度だつてないぞ。

なにせわたしはバイトに行く途中だっただけで。

まさか地面が突然抜けるとは思わなかったし、ダンゾウなんて原作キャラと会う予定はなかったのだから。

「そもそも、ここはどこだ？」

周囲を見回して首をひねっていると、またため息が聞こえた。

たぶんだが、気配らしきものがあちこちからするから、姿を見せているサイの他にも『根』の子達がいるのだろう。

彼らとは何度も会ったことがあるし、サイ以外の子にも何度も送ってもらっているので仲はいいほうだ。

わたしは所詮ペーパーの一般人出の下忍でしかないので気配とか読めないが、“いる”と思う方へヒラ〜っと手を振っておいた。また迷子にならないことを祈ってよ。

そういう気持ちで仲良くなった『根』の子等に挨拶をしたのだが、そこで面白いものを見ることができた。

ダンゾウとサイが驚いたように目を見開くという珍しい表情をしていて、わたしは二人に穴が開きそうなほど強くみられていた。

つと、いつか、わたしも彼らの表情が変わったのには驚いたので、逆に見つめ返してしまっただが。

あー、カメラがあればよかったのに。

「お主、あやつらのこと…」

「途中で言葉を止めるのはダンゾーの悪い癖だ。治した方がいいぞ」

「あ、ああ。それより並風ミナモ。お前あやつらがいるのに気付いていたのか？」

「や。いるもいないも、いるから手を振ったんだ。いなかったらふらん」

ダンゾウはなんか意味深みにサイをみていて、サイもかすかに頷いた。

なんだなんだ？

そのいかにも何かありますてきなのは。

やはり暗部を養成する機関だけはあるな。わけがわからん。

それよりその意味をわたしは知りたくない。

知ってしまえば、原作の流れにわたしまで参加する羽目になりそうじゃないか。

面倒ごとと借金は嫌いなんだ。

借金……

そういえば、早く帰ってバイトの件をどうにかしなくては

「お前のような奴が裏の人間と関わるべきではない」

「関わった覚えはないぞ」

サイに手をひっぱられ出口に向かうとき、考え事をしていたわたしにダンゾウが怪しげな言葉を投げかけてきた。

何度もしつこい。

関わりたいとは思っていないんだけど、なぜか出会った。こればかりはわたしの意志じゃない。

本当になぜだろうね？

なにせわたしはバイトをして任務をこなしてさっさと金をためなければいけないんだ。

それにわたしとダンゾウ達との関係は、“ただの迷子とそれを送る者”というだけだ。他にはないはずだ。

「次は容赦せぬ」

「いやそこはしろ。年の功で心は広く持つべきだ。

なにせお前はわたしよりも遥かに年上なのだ。時には懐具合の広さを見せ付けてやるのも、相手に融通を利かせる手段の一つだろ」

次に出会うことがあったら、『根』やダンゾウがわたしを殺す

そういうことらしい。

ソレは困るな。

まだ我が家には借金があるし、母と父の給料だけでは暮らしていけ

ないだろうから。

「……」

「ん？なぜそこで二人ともだまる？」

サイは元から口数は少ない方だったけどさ。

また二人は照らし合わせたように黙り込んだ。

沈黙ということは、『是』と『容赦したくない』と受け取っていいのだろうか？

よくわからないが、つまるところダンゾウは心が狭いらしい。

頑固爺というやつか。

サイたちも大変だな。こんな石頭に従っているなんて。

バイトに行く前に迷子になった日。

地盤沈下に巻き込まれて気が付けば『根』の総本山にいた。

あちこち岩盤とかパイプとかにぶつけたので体が痛い。

謎の会話をしたら、ダンゾウが考え込んでいた。

本当に何考えているのかさっぱり不明な人だ。

サイに家の近くの市まで送ってもらった。

もっと口寄せの術を活用した方がいいと言われた。

10 迷子と暗闇の秘密（後書き）

ミナモは声に出すときだけ、ダンゾウを「ダンゾー」と間延びして呼びます。

決して間違いないですよ〜（汗）

11 鈴取り演習

自己紹介および、ダンゾウの隠れ家に落っこちた翌日。

鈴取り合戦をやった。

というか、本当に鈴を奪えという演習があったことに驚いた。

内容は原作そのものだ。

それから考えるに、この世界は順調に、原作通りの道をたどろうとしている。

これではわたしは未来を知っていることにならないだろうか？

原作の内容は、見た限りは全部覚えていくけど…

これは予想外だ。

その上忍はわたしのはるか斜め上を憂い九予想外の行動をしてくれた。

おかげでどうやってチームワークを呼びかけ、上忍から鈴を奪おうか考えていたのがすべて無駄になった。

「じゃあ、この二つの鈴を」

この気弱そうな上忍。名を黒筆アザナ。

文字の『字』でアザナと読むらしい。

その彼が、わたしの知る知識と同じように、鈴を取り出し、奪い合えといった。

ちなみに取れなかったらアカデミーに戻しますと、少し間延びした口調が告げた。

とれなかった“奴”ではないことから、“一人一個鈴が必要”とは言っていないので、カカシより心根が優しい気がする。

そうしてみせられた鈴を見て、疑問が浮かぶ。

あれ？どうみても目の前のものは、アザナ上忍の言葉とは違つのだが…。

目を擦ってみるが目の前の現状は何も変わらない。わたしの目はおかしくないようだ。

では、目の前にあるものは本物なのか…

「アザナ上忍、それちょっと貸して貰えないか？」

「え。あ、どうぞ…」

渡された鈴を一つずつ手のひらの上で転がす。

チリーン チリーン チリーン

どうやらわたしの目の錯覚ではないようだ。

カナタと花太郎も『ソレ』に気付いたようで、わたしの掌の上にある鈴を同じように数えはじめた。

今度はカナタが鈴を指で指しながら、三人で「いち、に」と数えて行く。

チリーン チリーン チリーン…

さすがにこの展開は予想外だった。
すべての鈴がきちんと音を立てる。
どうやら『これ』は幻覚ではないようだ。

黒筆アザナは不思議そうにわたし達を見て、鈴がどうかしたと首を傾げている。

なんで上忍が先に気付かないんだと、こっちが首を傾げたくなった。

「どうかしましたか？」

「あ、先生」

「なあ、先生。変じゃねこれ？鈴って二つを奪い合っただろ？」

「はい。そうですよ」

「…だよな」

ならどうして

わたしたちが掌のものを一つずつ転がして、鈴の音が 『三つ』
したのだから。

「わたし達の錯覚じゃなければ…鈴が三つあるようにみえるんだが？」

「え？」

わたしの言葉に困ったようにオロオロと視線をさまよわせる花太郎と、あきれた眼差しのカナタ。

アザナ上忍は鈴を食い入るように見て

「ええー!?!」

チリーンとだされた三つの鈴をみて、しまったー!という雄たけびをあげた。

しかしそこは上忍。

アザナ上忍はすぐに我に返った。

それから申し訳なさそうに笑うと、わたしの手から鈴を二つとろろろとする。

スッ

「・・・」

「あの、ミナモさん?」

鈴をとろろとしたので一歩後退してみる。

気分は、逃げるから追うという条件反射に感覚が近い。

そこへ

ガシッ!!

「逃げるミナモ!!!」

「え、えつとボクらで抑えとくから!!!」

なるほどね。たしかに三つの鈴はわたしがもっているわけで鈴は手の中。

ちよつと数も班員分びつたりある。

三つ。

困惑しているアザナ上忍を両脇から抱きついて引き止めるカナタと花太郎。

つまりこのままわたしが鈴を死守すればいいわけだ。

さすがは我が友。

やっぱり合格はしたいよな。

言葉にしなくともその思い受け取った！

以心伝心だな。

「ちよー！？三人ともどういうことですかあ！！」

「へへ！これで三人とも鈴ゲットだぜ！！」

「さすがミナモちゃん！戦わずして先生から鈴とっちゃうなんて考えたね」

…え？いや。それは違うぞ。

わたしじゃなくてお前等が考えたのだろうと言いたい。

そもそもわたしは鈴が幻覚じゃなくて、本当に三つあるのを確認したかっただけなんだけど。

ついでにいうと逃げたのは、近づいてきたから逃げてみたくなっただけで…。

まあ、いいか。

そのあと予想外にも鈴を三つだした黒筆アザナ上忍がネタばらしをし、われ等のチームワークを認められた。

いやね。

わたし、本当に何もしてないけどね。

それでも…

「これで本当に下忍だ!!」

喜ぶ二人のチームメイトに向け、わたしはニヤリと笑ってやった。

「アザナ上忍。この調子でさっさと中忍試験もさっさと受かろう!」

拳を握って、給料アップを目指すわたしの心からの訴えに、苦笑していたアザナ上忍とチームメイト二人が一気に固まった。なんだ?と聞き返したら、固まっていた三人がぎこちなく動き出した。

「お前、わけわかんねー」

「うわあ。み、ミナモちゃん?だって流石にそれは早すぎだよ。ボクら今下忍になったばかりだよ」

「そ、そうですねよミナモさん!!何事も手順というものがあってですな…」

「だがそれもまもなく起こる試験。

…中忍試験は一年に一度くらいはあるのだろうか?

やがて受けるのなら、今すぐ受けたい。

なぜならば、わたしとしては下忍の給料では借金は返済できないからだ!

つで、給料を上げるには中忍になるというすばらしい手段がある。だからそのためには今のわたしではだめだ。稼ぐ前に中忍レベルの依頼は間違いない死ぬ。

なので、今のうちからもっともつとわたしを鍛えて強くしてほしい。中忍になるそのためには、チャクラの練り方や術をもっと磨く必要がある。

でないが一番近い中忍試験にうからないではないか。

しかもこのまま下忍の給料だけで生きてけるとは思えない。特に我が家は――！」

つと、こういう話があったりなかったりした。

結局、原作から外れてしまったが、ここに、第四班も下忍として正式に認められたのだった。

11 鈴取り演習（後書き）

たぶんミナモが考えて行動しないほうが、いろいろ世界は劇的に動くんですよ（汗）

そしてミナモの目標はあくまで金稼ぎ。

だからいつも先を見すぎていて足元が見えない…

たぶん。そういつやつなんです。

12 はじめての任務

わたしたち、並級忍者の集合体。もとい第四班は本日初任務となる。

任務内容は、アカデミーの演習場の手入れだった。草刈りだ。雑草なんか負ける気はない。刈って、刈って…そして報酬をもらおう。

「用意は？」

「「おっけー！」」「大丈夫だ」

「道具は？」

「「鎌、軍手、ビニール袋！」」「」

「それではアカデミーに向かいます」

ほとんど遠足気分で向かった。

待ち合わせ場所は、大きな市場の手前。

迷子になりやすいわたしは、出かけ際に隣人たる花太郎によって捕獲されたので無事にたどり着けた。

子供三人では広すぎる演習場のことを考えて、しっかり作業道具を持ってくるようにいわれたので準備も抜群。

敵（草）に勝つだけの戦力はあるということだ。

そうして三人でアザナ上忍の後をえっちらおっちら歩いていて

なぜか気づけば自分だけ見知らぬ場所にいた。

「どこだここは？」

なんでこんな『あ』『ん』の門の近くにいるのか。まだ里の外に出てないだけかもしれませんが、ここは市場からはずいぶん離れていたような気がする。

本当に自分の方向音痴にはあきれてしまう。自分で自分が不思議でしようがない。

ともかくにもまずは班の仲間と合流する必要がある。

「救助隊を要請しよう」

鳥を口寄せをして、仲間に救助を求めた。

しばらくして「動くな」と書かれたメモを持って鳥さんが戻ってきた。

うーん。戻ってこられるなんて、この鳥さんやるな。

さすがは火影様や、サイとかイビキに教えてもらっただけはある。

わたしの口寄せは、迷子になりまくったあげく、暗部やら『根』の仕事の邪魔をしてしまい、対策として出会う皆様が教えてくれたものだ。

火影さまとは……その……迷子になって人様に迷惑をかけた回数分だけ説教をされ、そのツド顔を会わせていたのでずいぶん親しい。

班のみんなも下忍でしかないわたしが、口寄せだけは得意なのは理解してくれている。

先ほどの鳥と契約した巻物を眺めて、ちゃっかり冷蔵庫と契約できないだろうかと思ってしまった。

口寄せで冷蔵庫と直結していたら、迷子になっても食料に困らないとか。

あとで密かにやってみとうとは思ってる。

たぶん原作のテンテンのように、武器をしまっている場所が別にあ

るはずだ。

それを巻物で口寄せしてるはず。

ならわたしも口寄せをマスターして、冷蔵庫とつなげよう。

きつとこのままいつてもわたしは、中忍試験でさえ口寄せをメインで使ってたそうさ。

なにせそれ以外の取り柄が、金計算の速さと、迷子になることしかないのだから。

そんなこんなで門に寄りかかってボオ〜と自分が可能な忍術は何かと考えていたら、遠くから「ミナモちゃあ〜ん〜ん〜ん！」という花太郎の声と三人分の足音が聞こえてきた。

どうやら救助隊が到着したようだ。

これで任務を無事成功できる。

どんなに地味な任務でもお金がかかっているんだ。

きちんとこなさなくては、里の威厳にかかわる（＝依頼率が減る＝給料減少）。

「もう、さがしたよミナモちゃん!!」

「そうさぜ! あんまりほっつき歩くなミナモ。すげー探したんだぜ」

「ふむ。…というわけだ。どこに行ってたんだアザナ上忍。探してしまっただけじゃないか?」

「ええ!? なんでそこで僕ですか!??」

このひと、忍の根底を崩すよな。

なにせいちいち反応するし。

感情豊かだし。

唯一、忍らしかったのは、自己紹介のときのむやみやたらとプライバシーをばらさなかったアレぐらいだろうか。

なんで上忍になれたんだろう？

たぶん上忍試験は、グループ試験ではなく一人で受けるものだと思う。

もしかしてこの担当上忍は、一人になると鋭利な忍びに様変わりとか？

それはそれで見てみたい。

でも見るためにはこの担当上忍を一人にする必要があって、それはわたしが傍にいてみつけてはいけないというわけで…。

黒筆アザナに関することは考えるのはやめよう。
時間をもつたいない。

「さあ、草刈に行こう!!」

「ちょ！ちよつと待って！ミナモちゃんが一番先頭にいったら危ないから!!」

「なにを言っている？さすがのわたしとて、アカデミーぐらいにはたどり着ける！」

「その根拠はどこから!?!」
「勘」

四班の悲鳴がわたしを追ってきた。

でもなんとなくしゃくだったので、そのまま三人の誰かに捕まるよりも早くズンズン進んでみた。

背後からなにやら「そつちじゃない!!」って悲鳴が聞こえたけど、あつてると思うんだよ。

だから進んでみた。

自分が信じるアカデミーに向けて!!

【オマケ】

それは並風ミナモを含む、イレギュラーともいえる奇異な下忍班のある日の出来事。

すべては前世の知識を持って生まれた彼女が、^{ミナモ}極度の方向音痴だったことより起こった珍事。

「待って！待って！くださいミナモさん！！」

「先生！！今日ってただの土壌整備だよな！？アカデミーの演習場の手入れだけのはずだよな！？」

なのに、なんでオレらこんな森の中歩いてるんだよ！？」

「ボ、僕に聞かないでください！！」

「ミナモちゃん！！アカデミーはそっちじゃないよぉ！！」

「いや。わたしの勘ではそろそろ演習場が見えるはずなんだ」

「んなわけあるあかー！！！！」

突き進むこと数刻後　ミナモを先頭に、第四班は広い場所に出た。

ズポ！つと音を立てて茂みから四人が飛び出したところで

ザシュー！ブシュー！！

目の前は血が飛び散る戦場だった。

「あ、やば。また暗部の戦闘中に迷い込んでしまった」

「『また』ってなんだよ！？」

「お、お面…ってことは、本当に暗部！？」

「だろっな」

「せ、せんせえ…な、なんで。なんでボク達こんなところにいるんですか」

「しりません！ってかミナモさんどういことですかこれは！？」

「どつもこつもやっぱりアカデミーはこつちじゃなかったってだけだろっ？さあ、里はどつちだ？」

クナイのぶつかる音、術の発動する音。

広がる赤い血溜まりと倒れる人型のもの。

罵声と、とてつもない殺気が渦巻く、まさに戦場としかいえない光景。

それらをすべて当然のように受け止める少女に、班の全員が顔を青ざめさせる。

そのときの彼らの心は一つだったに違いない。

「くくくミナモ（さん／ちゃん）！！！！」

なんで平然としているの？

なんでこんな場所に迷いこむの？

なぜ迷子になる？

そんな思いの込められた叫びを聞きつけ、戦っていた忍たちの意識が第四班を捕らえる。

ザスザスザス！！

戦場だということもかかわらず漫才のようなコントをしている四人のすぐ側に、敵か味方かわからないクナイが飛来する。

「くくヒューー！！！！」

かすめたクナイに、戦闘になれてないらしい子供たちと、気が弱い上忍の悲鳴が上がり、脱兎のごとく三人はその場を逃げ出した。

その三つの悲鳴と、おいてかないでくれという声が山にこだました。

その後、暗部や敵の忍らが、彼らの後を追った。
しかし四人の逃げ足は速く、姿かたちさえ見つからなかったらしい。
そして里に戻った彼らは、暗部や火影に嚴重注意されたとかされて
いないとか…。

閑話 別にさ。原作知識があるわけじゃないんだよ（前書き）

とあるイレギュラーな琥珀色の少女に振り回される、これまた不運とキセキと勘違い成り上がったあるひとりの男の物語・・・もとい愚痴。

閑話 別にさ。原作知識があるわけじゃないんだよ

「それは、とある上忍師の嘆きであつた」

このたび上忍師なるものになり、しまいにはお子様たちの面倒を見るといわれた黒筆アザナといいます。
いや、あのですね。
別に僕が他の上忍師みたいに強いとか特別なことなど何もないんですよ。

ええ、それはもう本当に。

ほらこの世界は忍たちの世界。

ゆえに力自慢で国同士はもめていて、あげく領土争いとか・・・簡単に言えば戦争がたえないのが常だったわけですよ。

つまり僕らがこども時代において、学校とは今のようテキストに基礎を叩き込んで大人が子らを保護しつつ生ぬるく授業とかはなく、「これが殺しだ！ハイ実戦いつてこい！」と、まあ、こんな感じで忍術をたたきこまれた。

そうしてすぐさま戦場に放り出されるような時代だったわけです。もちろん当時は草狩りだけなんて依頼はなかった。

それが戦争というものだったから。
だから十代前半でみな中忍試験を受けるのは必然で、受けなくても下忍たちは、いまの時代の中忍レベルの実力を持って任務へと排出されていた。

僕は自他共に認めるほどには気が弱いと思う。

それでも気がつけば、時は流れていて、戦争もひとくぎりついて、穏やかな里で上忍になっていたわけです。
僕は僕ですから。

猿飛アスマ氏、はたけサクモ氏を含む12人のすごいひとたちや、うちはイタチとか、はたけカカシさんとか、波風ミナト氏やら、あんなすごいひとたちと比べないでほしいぐらい。
なにせ僕は戦争で名をあげてさえいないですからね。

なのになんで上忍師!?

そう思いますよね?それはよくつっこまれます。
似合わないし無理だともいわれることしばしば。

・・・なぜって 【あれ】ですよ。

僕が生き残っているから。

戦争にでた。

そこでの経験は今のまったりとした世代の忍のたまごたちとは比べ物にならない。

僕はただ生きてたかった。

死にたくなかった。

それだけをささえに、ヒーヒーいいながら戦場に行った。

嫌なら忍にならなければいいのに。むいてないよ。そう、よくいわれたものです。ただと言葉ほど世の中は軽くも甘くもない。一般人が生き残れるような時代じゃなかった。

必然とでもいのでしょうか。

戦争はどんな人間さえも変えてしまう。

ひともものも心もなにもかもがこわれていく。

そして怨嗟は続く。

優しいものを復讐者と殺人鬼へ。

気の弱いものは狂ったみちへ。

弱いものは。

必死で逃げるスキルをあげました!!!!!!

「っと、いうわけで僕は必死こいてにげまどっているうちに足が速くなりました！」

いいですかみなさん。人間死ぬ気になればけっこうなんでもできます。

たとえ名を上げなくとも・・・ああ、生きているってすばらしいですよねだって笹団子がおいしい!!」

「いやいやいやいや!!先生、いまどう考えてもシリアス展開だろ!!なんでそこで団子について力説してるの!?!」

「……………無理です」

「しっかりしてせんせー!?!」

「だって僕はただがんばって戦争を【生き抜いた】だけなんですよ
！！なにが特別できるってわけじゃないんです！！
それなのに。それなのに……！！！！！！」

現実逃避したっていいじゃないか。

そう。今、僕らの目の前には、なぜか血と殺戮の嵐。
側で「ふむ。またやってしまったか」となんでもないように呟いて
さっさとユータンしようとしている　チャクラ切れたとかで変化
の術が解けて琥珀色の髪が目立つ　少女によって、【また】僕の
四班は暗部の任務にドッキング。
これで現実逃避しないほうが可笑的い。

上忍師とはいえ僕はふつうレベルなんだ！！！！

こんなの巻き込まれて生きて蹴るわけじゃないか！！
ああああもう！ミナモトさん！！！！

なんで僕はこんな独創的なこのいる班をみているんだろう？

閑話 別にさ。原作知識があるわけじゃないんだよ（後書き）

はあゝ……。やべえつす。

すっかり文章の書き方を忘れてしまった（汗）

というか、文章を打っている最中に事故がおきてデリートされてしまった。

そのせいでアザナさんが奇跡と勘違いと運だけで生き残れた敬意が消えてしまいました。

内容をまったく思い出せないのです、かなりはしよった文章になってしまいました。

中身がなくて申し訳ありません。

13*闇を飲み込む飴色暴風雨(前書き)

スランプのままですが…orz

お久しぶりです。

いつだったかどこかで言ったように、今回は「ダンゾウ」さん視点です。

13*闇を飲み込む鉛色暴風雨

）ハイパー勘違い爺さんダンゾウの視点　　）

なによりも
そして だれよりも

深い“闇”

深淵の底より明るい“ひ”を望むは

だれよりも 真実 陽^ヒを望むがゆえに 非^ヒを正面から否定し 日^ヒを
おくる

そは“闇”を衣に纏い
けれど そは 願いごと

ゆえにそれは暴挙と化するだろう

ところが 真実が 願ったのは・・・
たったひとつの 灯火

その小さな炎を 《木の葉隠れの里》 といった

+++ 火の意思を継ぐ ・ 1 +++

その“こども”と出合ったのは、まだ“こども”が少女と呼ぶに

は幼すぎて性別の判断が難しい……そんな頃。

わしが森で『根』の子らの相手をしていたときに、“こども”は大きな足音を立てて現れた。

親戚の少年のおさがりだという男物のズボンとTシャツをきていて、短く切られた髪や顔には泥がついていた。

手足は傷だらけで、懸命に森の中を歩いてきたと思われるその姿に野盗にでも襲われたのだろうかとはじめは思った。

しかし“こども”に恐怖も悲しみもなかった。

その空色の瞳を涙でぬらしているわけでもなく、おびえるでもなく“こども”は周囲を無感情に見渡すと「ふむ」と、どこか年寄り臭い仕草でつぶやいて、一人納得したのか来た方向へ戻ろうとする。

「邪魔をしたな」

“こども”はそう捨て台詞を残し、再びガサガサと茂みをかき分けて去っていった。

かきわけて？

「っ!？」

あまりのことに相手が敵の忍者、あるいは間者ではないかと、疑う暇さえなかった。

ようやく目立つ戦争が終わったものの、いまだこの忍の世界の情勢は不安定だ。

そんな中で不自然に現れた“こども”。

子供といえど、忍には年齢さえも関係ない。

自分の考えから、いまの“こども”が【敵】である可能性によつちか思い当たり、慌てて子供の後を追いかけたが、気配や足跡ひとつなくその姿は何処にも見当たらなかった。

一瞬、狸にでも化かされたかと、いや“木の葉”の周辺であったのだから狐やもしれぬ。

そこでふと、九尾のガキのことを思い出した。

里の恨みを一身に背負わされたがゆえに、暗い顔をしている波風ミナトとつずまきクシナの間に生まれた遺児。

いまの不思議な“こども”のキラキラ輝く髪が、あの忌まわしき九尾のガキを髣髴とさせた。

「まさかの・・・」

まさか“あれ”は、九尾のガキが変化でもしたのだろうか。

もしかするとわしらの知らぬ場所で、ヒルゼンがあ狐のガキに忍術を教えたのやも知れぬ。

それはとても危険なこと。

この里は憎しみを、九尾を『封じられている』あのガキに向けることで、戦争や九尾事件の悲しみからなんとか均衡を保っている状態だ。

もし先程の“こども”が、ミナトやクシナの血を引くその『才』をもっていたら。

ナルトは　　里を恨むだろう。

九尾の人柱力が『力』をもってしまえば、その感情一つで・・・
・一瞬で、里は滅んでしまう。

人柱力とは、たった一体いるだけで世界の半分を滅ぼしかねない存在だ。

「うちは」よりもより恐ろしい脅威にして災害。

『川で魚を釣って焼いて食べようとおもったんだ』

『ピクニックよりも山菜取りにはじめからおけよかっただな父
よ』

『そうだなあ』

「……………」

無事そうだ。

それにしても話し声ということは、この下には先に人が居たことになる。

そこで先程の“こども”のことを思い出し、自分が辿ってきた

“こども”の形跡が残っている 道を振り返る。

足跡もちょうどこの穴の手前で消えていた。
草に隠れていて、穴が見えなかったようだ。

記憶を振り返り、そういえば里の中に『並風』ナミカゼという風変わりな一族がいたのを思い出し、ああ、こいつらはまぎれもない一般人だったのだなと なぜか納得してしまった。

見上げた空は、雲ひとつないのになんとなく泣きそうだと思ったのは……考えたくない。

その後、怪我は（なぜか）まったくないようだったが、そこから出る方法など考えてもいかなかったとのんきな会話がきこえ、またすすりなくような男の声が聞こえ、思わずため息がでてしまった。

匿名希望で救助を呼んだところ、慣れた様子で犬塚分家の犬とクノイチが搜索に来た。

犬の傍に居た忍装束の女が、涙ぐむ男を呆れたように叱咤して、「これで何度目ですか！？いいかげん忍さえ知らないような穴を増やさないで下さいよ」と言っていた。

そのまま父親と思われるほうの『並風』を犬が啞えて颯爽と里へ帰って行った。

しっかりとその立派な体格の犬の尻尾をつかむように金色の“こども”がくつついているのをみたとき、“こども”と目が合った気がした。

しかし“こども”は何事もなかったように、すぐに視線をそらしてしまった。

『並風』一族　あの家はあの“波風ミナト”に良く似た髪色を持ち、名前のような並な暮らしとはかけ離れたド貧乏暮らしにくわえて、超のつく方向音痴を排出し続ける、なにひとつ「並」なことがない一族であった。

そして唯一ヒルゼンが里にかけた術のかからない存在がいる一族。

里からうずまきクシナという存在が消された。そこにはクシナとミナトが夫婦であったことも、そこに“ナルト”という赤ん坊がいた事実をも亡き者とするための処置。

クシナに関するすべてを消し去った術に、並風ミゾベだけがからなかった。

あやつの妻であるマリモは、後に火影自らが術を解除していたが……
本人いわく、恐怖が上回ったというが……真意は定かではない。

どこが『並』なんだ！？と、あの穴事件のあとに探らせた調査報告を見て内心激しくつつこんでしまった。

いや。あの一家は、もしかするとあまりに普通でないことばかり起こるからか、「並な暮らしがしたい」「悪いもの（＝トラブル）よ吹き飛ばせ！」的なイメージで『並風』と先祖が名乗るようになったのではなからうか。

どちらにせよ。彼らはどこまでも一般人であり、忍としては不向きなほどに運動音痴であり、さらには目立つ旧家でも功績があるわけでもないため、やはりただの一般人であり、関わりがない者らにとつては、とことん存在感さえ薄い一族ではある。

あれから数年後。

よくよく里の中をみていれば、嫌でもよく「ミナモ」という名前を小耳にはさむようになった。

そのことから、“あれ”は間違いなく【あのミゾベ】の子供であり、相変わらずの迷子節^{マイゴツシ}を発揮しているのだらうと　最近はあるを思うだけで頭痛がしてくる。

過去の調査記録をみたところ、以前はミゾベがクレーターをつくらせたやら、謎の鍾乳洞をみつけたり敵の隠れ家を見つけたりと色々できた。

たぶんクレーターの件はミゾベではなく、当時ミゾベにちょっとかいをだしていた『赤いハバネロ』ことうずまきクシナによるものだらうが。

そこは先のヒルゼンらの術により改ざんされているようだった。

この一族特徴の迷子節は、相変わらずで、ミゾベの方は里の中なら迷わないという。

だが子の方のミナモというのは、里の中だろうと関係ないようで、よく搜索願いを出されては犬塚が悲鳴を上げているのを目撃する。

驚くことといえば、この間は突然火影の執務室の机が動いたと思いきや、そこから埃と蜘蛛の巣まみれで並風ミナモが登場してきたことだ。

どれほどの迷子になれば火影の執務室机の下から出てくるのだろうと、頭痛が増した。

その隠し通路のことはさすがのヒルゼンも知らなかったようで、ここ数十年は使われた形跡がなかったという。

どこから入ったのかと問えば、顔の筋肉ひとつ動かさず並風ミナモは「石につまずいて顔面から倒れて木に正面衝突したら、ぶつかつた木の表面が回転扉になっていて、気付けばうろの中に閉じ込められていた。でれなくなつた。窒息して死ぬのかと思つたら、今度は突然足元に穴が開き転がり落ちて、そのまま歩いてきた」と淡々と事務報告のように告げられる。

それに慌てたヒルゼンは、すぐにその隠し通路が何処につながっているかを調べさせ、その先に結界の張られた部屋にぶつかりそれ以上進むことができなかったらしい。

並風ミナモにさらなる詳細を訊いたが、そんなものはなかったという。

術のきかなかつたミゾベの例もある。

これは“もしかして”と思わずにはいられなかった。

里に害なしかねない要注意一族が増えた。

風の噂や暗部たちの報告で、“あれ”が八歳になったと聞いた。何度か森での戦闘中や『根』の子らがいるところに、“あれ”は図ったかのように現れる。

何度目かの再会のとき、わしが出会った“並風ミナモ”は、相変わらずみすばらしい身形をしていた。

あれはドブにでもはまったあとか？
泥とゴミまみれで、肩にネズミがのっている。

「・・・・・・・・」

【このタイミング】で、なんでくるのだろう。
それともこの子供はすべてを“知っていて”、わしのもとに来るのか？

「なんのようだ？」

自分の考えに悪寒が走り、うまく口が回らない。
その言葉一つ言つのも口が渴き、大変だった。

「うちはシスイを殺したか・・・」

わしが人を殺し、その者から目を奪っている。そんなときでも“あれ”の表情は動かなかった。

前々から思っていたが、“これ”には感情がないのだろうか？まるで『根』の子らのようだ。

いや。それよりも出会った当初からの落ちつきよう。あれは子供のする表情でも言葉遣いでもないだろう。

こやつは火影に言うだろうか？わしのことを。

それとも「ばかなまねはやめろ」と、ありきたり正義を振りまいてとめるのだろうか？

言葉を交わすうちにひととしては嫌いではなくなっていたけどもだが、この光景を見られてしまったからには：消すしかないか。

そう思ったところで「いやんなつちやうわ」と気が抜けるような、いままでの“並風ミナモ”からは想像できないような、このことにもは不釣合いなおちやらけたような口調で盛大にため息をつかれた。やはりこんなときでさえ、その顔の筋肉は動いていない。

しかもそのまま“あれ”は、落とした財布を捜さないと言わんばかりの軽さで、肩をすくめた。

「やれやれ。もう原作か。って、ことはもうじきうちが暗殺事件が来るわけか・・・さて。どうやって関わらないようにするか。サスケとは同学年だしな・・・。このままやつが生き残ると、イタチのせいで必然的にうつつとしいまで根暗になるであろう奴を里抜け間で見続けないといけないのも・・・うざいな。ああ、うざいとも。ならわたしが自らやつから……。あ、やつが敷地を借りて野菜の栽培をしようとするのも一つの手か？いや。だが、それでは借用にかかる費用が・・・」

ぶつぶつと独り言なのかこちらには聞こえないほど小さな声でさ
さやかれたが、「うちは暗殺」やら「生き残り」や「イタチ」、「
根」、「里抜け」など聞き捨てならない単語が聞こえてくる。

「おぬし……なにを知っている？……何者だ」

思わず手にしていた死体を放り、目の前の8歳の子供に向けてク
ナイをむける。

首元にクナイをつきつけられていようと怯えた表情一つ見せない。
その空のような目は、すべてを包み込む羽陽に曇りひとつなくまっ
すぐで

これが本当に『八歳の子供』だろうか？

なぜかふいに不安がよぎる。

この目は“ひと”のする目だろうか。

透明すぎて逆に恐ろしい。自分の心の奥底まで見好かれるような透
明さ。

このままではなにかが失敗する。ダメになる。そんな恐怖。

そんなわしの内心を知ってか、ニイっと“それ”は口端を持ち上
げて笑った。

「いや、なに。名乗るほどのものじゃあないさ。原作では名前も出
ないし、馬鹿でかいイベントと重なってるせいで里のみんなには誕
生日さえ忘れ去られるし、借金苦で日々どうやって生きていこうか
必死なぐらいだ。

ああ、ようは、いっぱしの脇役だ………と、いつて

みたり。というか、ダンゾーさん、わたしのことを知っているだろ
うに。なにを今更？」

ノリがいいというかなんというか。

その言葉の後で、すっかり「いまの一度でいいから言ってみたか
った台詞ベスト4だな」とイタズラが成功した子供のように無邪気
に笑われては力も抜けそうになる。

こんな表情もできるのかと驚くが、人形が設定されたプログラムど
おり『笑みの形を浮かべた』だけのようにも見えてしまう。

なにせ次の瞬間にはいつもの表情に戻っていたのだから、わしがそ
う感じて仕方がないだろう。

だが、ここで“これ”を見逃すことは、忍としてこの木の葉に生
まれた以上は不可能だ。

なえそうになるそれを必死で押しとめ、警戒を解かない。

「もう一度問う。答えなければ殺す。貴様は何者だ？」

「いや。なに。ただの」

「迷子だ」

「ふざけているのか？」

「いやいや本当に迷子だ。っで、よければここからダンゾーさんが
逃げるついでにわたしを市まで連れてってはくれないか？今の時間
ならちょうどタイムセールだ。」

きつと母もいるだろうから無事に我が家へ帰れること間違いなし。いや、なに。ここがどこかとかはぶつちやけどうでもいいさ。里の中ではあるのだろう？ならいつかは家に帰れるだろう。

その目玉を奪ってる様子からして、記憶違いでなければ「うちは」の集落近辺であるというのは理解できるがな。

だからといって別に里が「うちは」をどうこうしようが、私と関係もなく、我が家の借金が増えなければ問題ないことで、だからこそ今わたしは「うちは」には興味はないんだ。

もっとも重要なのは、どうやって家に帰るかであって、市場からならなんとか家にたどり着くだろうという仮定が存在すること。

だが、市場から家までは百回以上は往復したが、微妙に家にたどり着く自信はない。

ここが困ったことで。まあ、必死におぼえたからたぶん大丈夫だろうとは思っ。

あくまで『たぶん』だが。・・・まあ、そのあまりに儚い憶測により家にたどり着ける『だろう』と思うわけだ。

つと、いうわけで。ひとりで帰るより、送ってもらいたい。たのめないだろうか？

あ、それより車輪眼の移植を急いだほうがいいのか・・・？

いま移植しないとソレは効果を発揮しないのか？あとじゃだめか？せめてホルマリン漬けかなにかにしてしばらくもたせられないだろうか？できれば目玉より、わたしを助けることをさきに行っほしいのだが。

いや、無理には言わないができればお願いしたいのだが・・・。

ああ、そうか。こういう手段もあるな。

『断つたら、ダンゾウが行った悪事のすべて』を火影に告げ口して、根の存在もついでにはらしてしまおう』

とか？」

ここまで“あれ”がしゃべるとは思わなかった。
否、それより危険な子供だと思った。

“これ”は『すべて』を知っている。

心の底から恐ろしいと、敵に回してはいけない“もの”だと。
背筋に冷たいものが走った。

ダンゾウ2へつづく

13* 闇を飲み込む飴色暴風雨（後書き）

11/13 誤字修正。連絡くれた方ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7923m/>

NARUTO ~ 飴色疾風伝 ~

2011年11月16日19時53分発行